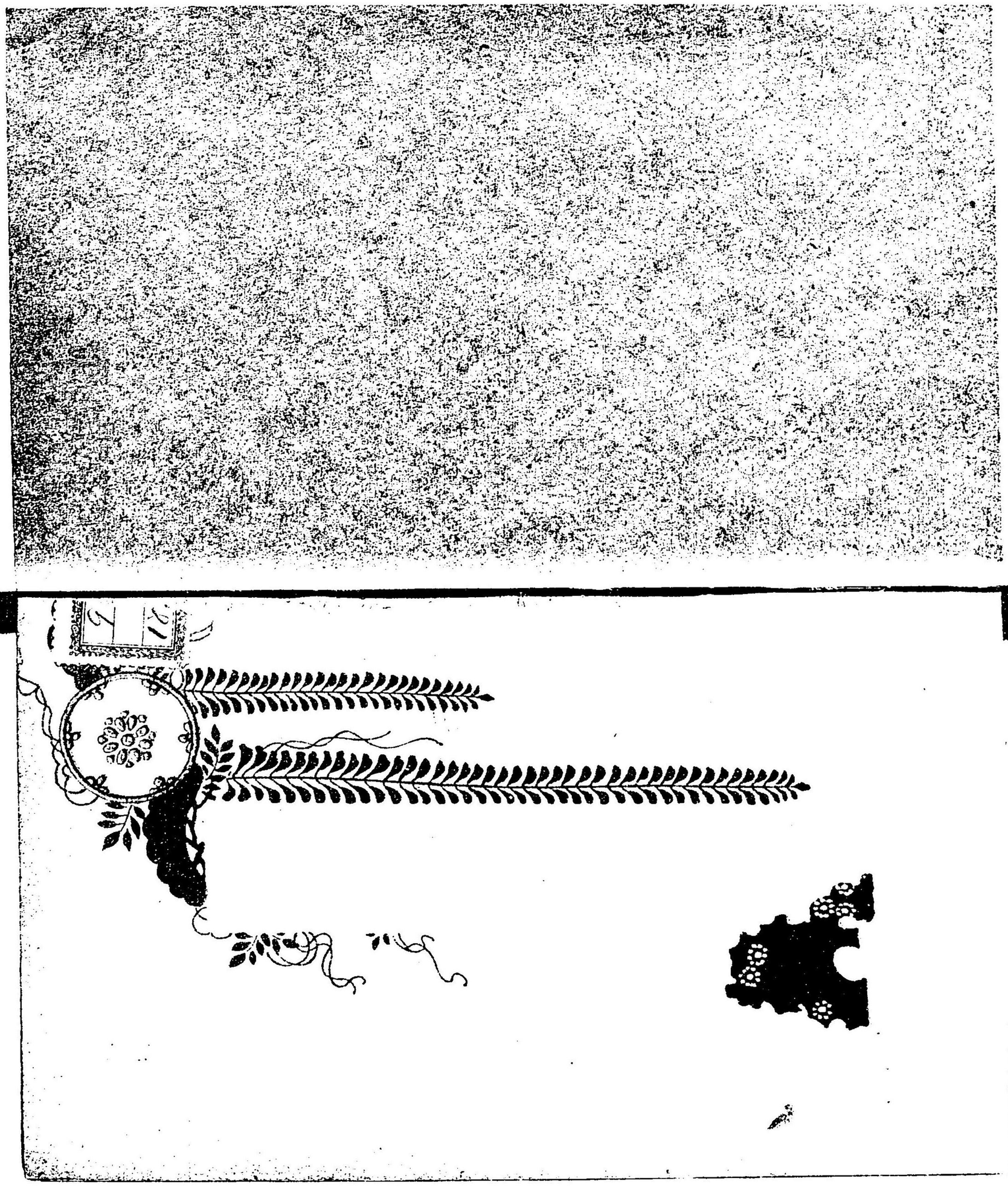


養老……一
忠度……一四
敦盛……三〇
白菊……四八
嵯峨……六四
橋辨慶……八一
春榮……九七
道成寺……一一二
富士太鼓……一二八
土蜘……一三七
西王母……一四七

籠……一五三
草子洗小町……一六〇
唐船……一七四
紅葉狩……一八七

能の栞　三の巻

大和田建樹著

養老

前ジテ　老翁　小牛尉又は小尉　尉髪　厚板沿流　腰帯　水衣　扇　杖

後ジテ　山神　耶耶男又は翠男　面　透冠　黒垂　色鉢巻　大口　狩衣　腰帯

ツレ　男　尉斗日　大口　水衣　腰帯　桶

ワキ　勅使

大臣烏帽子　厚板　大口　狩衣　腰帶　扇

ワキヅレ　隨行者

ワキに同じ

アヒ　里人

引立烏帽子　素袍上　狂言袴　脚半　扇　鬘掛けて出づ

養老の瀧の故事を仕組みたる能にて。帝このたび濃州本巢の郡に不思議なる泉の出て來たるよしを聞召し及ばれ。急ぎ見て參れとの宣旨によりて官人その瀧のもとに至りしに。老人親子來りて。その水の世の常ならず。飲めば心すゞしくなりて老を忘るゝ靈水なるよしを語る程に。音樂聞え花ふりて山神來現し。上に明らかなる君ましませばこそ下にも稀なる孝子の出てたるよしを述べ。歌ひ舞ひつゝ御代萬歲と祝ひ給ふ事を作れり。太鼓あり。季節は春。土地は美濃。脇能に用ふ。

ワキ出づ

次第にてワキ出づ。ツレは二人の事も四人の事もあり。二人の時はワキと共に三大臣と稱へ。四人の時は五大臣と稱へらる。

「風も靜にならの葉の。〈。ならさぬ枝そのどゞけき」の謠すみて。

「抑も是は雄略天皇に仕へ奉る臣下なり。さても濃州本巢の郡に。不思議なる泉いでくるよしを奏聞す。急ぎ見て參れとの宣旨に任せ。唯今濃州本巢の郡へと急ぎ候。」の名乘あり。「治まるや國富み民も豐かにて。〈。四方に道ある關の戸の。秋津島根や天ざかる。鄙の境に名を聞きし。美濃の中道ほどなく。養老の瀧につきにけり。〈。」

シテ出づ

の道行あり。ワキツレと共に脇座より順々に着席すると。一聲になりてツレ先に立ちシテ出づ。眞の一聲なれば橋掛にて向き合ひ歌ふなり。ツレは水桶を持ちシテは杖を突く。

二人にて「年を經し。みのゝお山の松陰に。猶すむ水の綠かな」を歌ひ。正面直してツレ「通ひなれたる老の坂。」又向き合ひて二人「ゆ

く事やすき心かな」を歌ひ。それより舞臺に入りてツレは眞ン中にシテは仕手柱に立ち。サシより下歌上歌をうたひ。「老を述べたる心こそ」より入り替りてシテは眞ン中にツレは仕手柱のずッと先に出てゝ立ち居ると。謠切れてワキ詞を掛く。

ワキとの問答

ワキ「いかに是なる老人に尋ぬべき事の候。」シテ「こなたの事にて候か何事にて候ぞ。」ワキ「お事は聞き及びたる親子の者か。」シテ「さん候是こそ親子の者にて候へ。」ワキ「是は帝よりの勅使にて有るぞとよ。」と聞き。下に居て敬禮の意を表し。有難や雲井遙に見そなはす。我大君の勅を。賤しき身として今承る事の有難さよ。是こそ親子の民にて候へ。」と歌ひ。ワキ「さても此本巢の郡に。ふしぎなる泉いてくるよしを奏聞す。急ぎ見て參れとの宣旨に任せ。是まで勅使を下さるゝなり。まづ〳〵養老と名づけそめし。謂を委しく申すべし。」といふ間にシテ立ちて「さん候これに候は此尉が子にて候が。

朝夕は山に入り薪を採り。我等を育み候處に。ある時山路の疲れにや。此水を何となく結びて飲めば。よのつねならず心も涼しく疲れも助かり。ツレ「さながら仙家藥の水も。かくやと思ひ知られつゝ。やがて家路に汲み運び。父母に之を與ふれば。」シテ「飲む心よりいつしかに。やがて老をも忘れ水の。」ツレ「朝寐の床も起きうからず。二人「夜の寢覺もさびしからで。勇む心は眞清水の。絶えずも老を養ふ故に。養老の瀧とは申すなり。」ワキ「げに〳〵聞けば有難や。さて〳〵今の藥の水。此瀧川の内にても。取り分き在所のあるやらん。」シテ「御覽候へ此瀧坪の。少しこなたの岩間より。出てくる水の泉なり」と右の方受け見て其泉を教へ。ワキ「さては是かと立ちより見れば。げに潔き山の井の。」シテ「底すみわたるさゞれ石の。巖となりて苔のむす。」ワキ「千代に八千代のためしまでも。」シテ「まのあたりなる藥の水。」ツレ「誠に老を。」シテ「養ふなり」と詞足し

て初同となる。初同の内に受けて出て開き。角とりて左に廻りワキに向ひ留むると。大小打掛になり。シテ眞ン中に行きて下に居る。ツレは初同になると直にシテの後より地の前に至りて座着く。クリよりサシまでは何の事もなく。「下ゆく水の藥となる。奇瑞を誰か習ひ見し」とワキに向き。打切ありて「いざや水を結ばん」とツレに向ひて諸共に水汲まんとする心を知らせ。」その外離の荻花は。林葉の秋を汲むなりや。晉の七賢が樂しみ。劉伯倫が翫び。たゞ此水に殘れり。汲めや汲め御藥を。君のために捧げん」とワキに向ひて。靈泉を汲みて君にまゐらすべき心をあらはし。「曲水に浮む鸚鵡は。石にさはりて遲くとも。手にまづ取りて夜もすがら。馴れて月を汲まうよや。なれて月を汲まうよ」と立ちて後見座の方へくつろぎ。水汲みにゆく心を見せたり。

それより仕手柱に立ちてロンギとなり。「養ひ得ては花の父母たる雨

中入

「露の」と正面へ出て。翁も養はれて」とワキに向ひ。「此水に馴衣の」と少し出てゝ下に居り。「袖ひぢて結ぶ手の。影さへ見ゆる山の井の」と下を見て水に心を附け。「げにも藥と思ふより」と立ちて少しくつろぎ。「老の姿も若水と。みるこそ嬉しかりけれ」と立ち歸りて本の座に下に居る。

「勅使も重ねて感涙して。かゝる奇特にあふ事よと」とワキの詞あり。「いひもあへねば不思議やな」と立ち。「天より光り輝きて」と右受けて光り輝くを見る心あり。「瀧の響も聲ずみて。音樂聞え花ふりぬ。これ唯事と思はれず」と右へ廻りて開き。來序になりて靜に中入す。ツレも入るなり。

シテとツレと入ると末社來序になり里人のアヒ出づ。

かやうに候ものは。濃州の傍に住居する者にて候。さる程に本巢の郡に。養老の瀧と申して。藥の水出來仕り候。その樣躰は。いにしへ老いたる親を持ちたる若き者の御座候ひしが。彼者たぐひなき親孝行の者にて。明暮山路に分け入り。薪を取りそれを代なして老いたる親を養ひ申したるが。ある時彼者山路の疲れに。休まんとて瀧の邊りに薪をおろしおき。少しまどろみ。目さめて瀧壺へ下り水を結びてたべ候へば。いつも休みたるにかはり。疲れ助かり候程に。本より親孝行のものなれば。それを結びて我家に歸り。老いたる親にたべさせ候へば。彼者それより眞ッ盛の男となる。子はいよ〳〵若く罷りなり候。是と申すも親孝行の志ふかき故。天道の與へぞと。感涙を流したると承りて候。さてこそ老いたるを養ひ得たる藥の水なればとて。即ち養老の瀧と申し習はし候。やあ參る程に。是こそ養老の瀧なれ。まづは見事なる瀧かな。

誠に親子の人心正直なる故。諸天影向あり。此山の山神牛王。

養老

御瀧霊の守護となり。藥の水となし給ふ程の御事なり。急いで我等も水をたべて若がへらばやと存ずる。

といひて水汲む體をなし。「一ばい〳〵又一ばい」と歌ひ三段の舞ありて。後。

あら〳〵めでたや〳〵な。藥の水をほしいまゝに飲みければ。髮のあたり。髮のまはりがそゝめいて。若き男となりたるなり。（この處にて掛帽を取る）かほどにめでたき事あるまじ。是までなれや歸るぞとて。〳〵。本の在所に歸りけり。

と謠ひつゝ舞ひ納めて入る。この間の替には。藥の水といふ一番の狂言を用ふる事もあり。

替の間

後ジテ

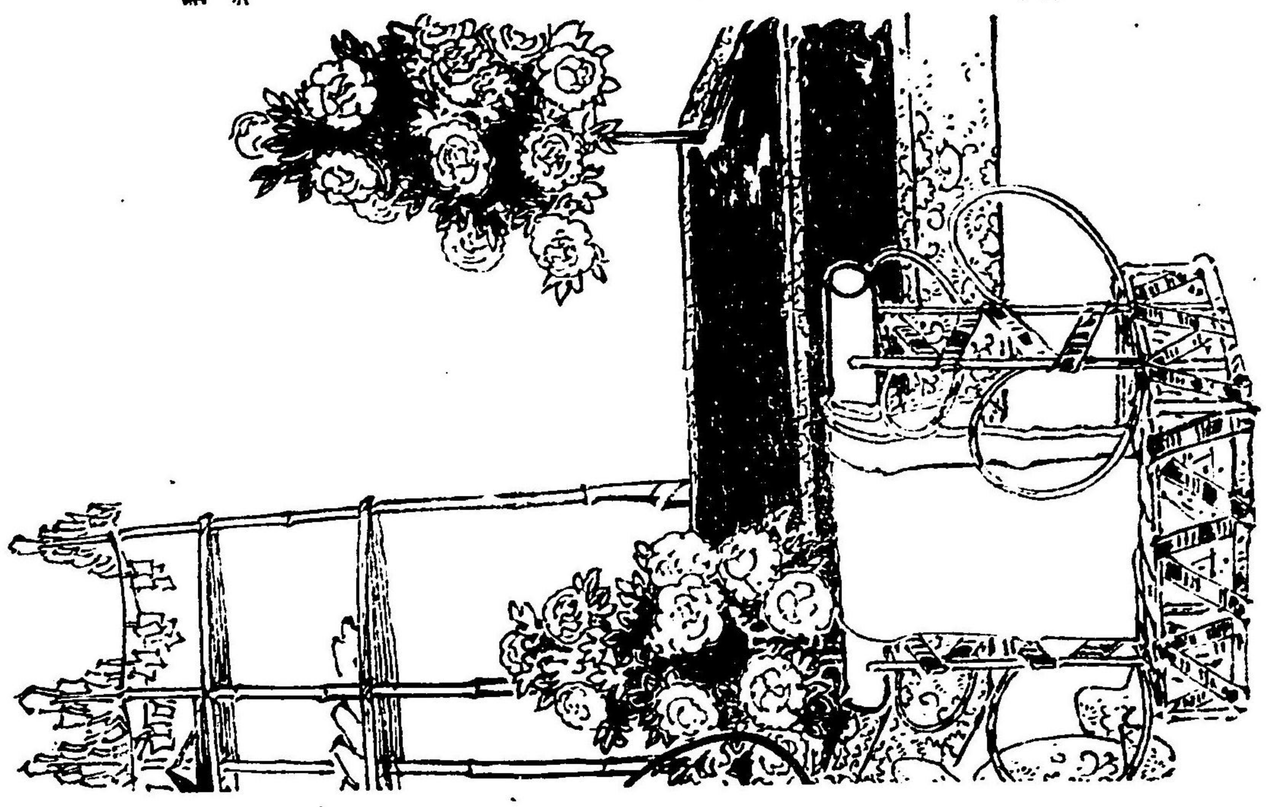
出端にて山神の姿なる後ジテ出て。仕手柱にて（一の松の事もあり）

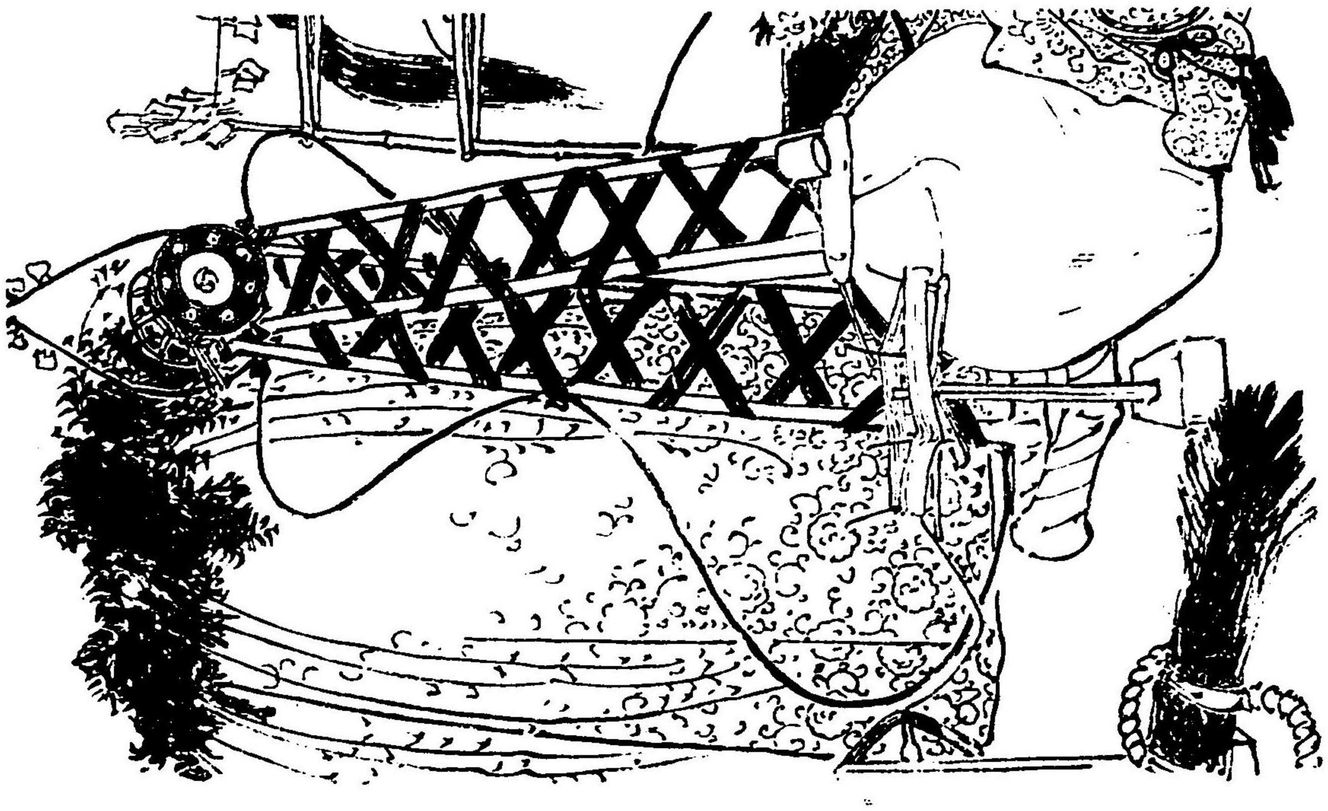
「有難や治まる御代の習とて。山河草木おだやかに。五日の風や十日の。天が下てる日の光り。雲はあらじ玉水の。藥の水はよも盡き

キリ

じ。あら有難の奇瑞やな」と開き。それより角の方へゆきて。「我は此山々神の宮居」と山を見上ぐる心にて右の方を高く見。又は楊柳觀音菩薩」と左へ廻り。「峰の嵐や」と指して出て。「谷の水音」と面使ひて低く水の流を見る心あり。「拍子を揃へて音樂の響。瀧つ心を澄ましつゝ。諸天來去の影向かな」と。狩衣の露を取りながら一つ廻りて大きく開き。達拜して神舞となる。

舞の上りは和歌にて。「松陰に。千世をうつせる緑かな」と扇のけて開き。「さも潔き山の井の水」と左右打込して開き。「水滔々として」と扇にて招き出て。「波いう〳〵たり」と指し廻し。「幾久しさも盡せじや盡せじ」とイウケン扇して祝の心をあらはし。「かへす〳〵もよき御代なれや。〳〵。萬歳の道に歸りなん。〳〵」と正面に出て。兩袖卷き込みて留拍子ふみとむる常の如し。





忠度

前ツテ　老翁　朝倉尉　尉髪　頭巾目　水衣　腰帯　扇　杖　木の葉

後ジテ　薩摩守忠度　中將　梨子打烏帽子　黒垂　白鉢巻　厚板　大口　法被　腰帯　太刀　扇　矢　短冊を附く

ワキ　僧　角帽子　頭巾目　水衣　腰帯　數珠　扇

アヒ　里人　狂言上下　扇

薩摩守忠度が和歌の師なりし俊成卿の御内にありける侍。出家して後西國行脚と志し。須磨の浦に至りけるに。忠度の幽霊あらはれて。當時戰死の有様を物語る事を作れる能なり。修羅物の一つにして太鼓なし。季節は春。土地は攝津。

ワキ出づ

シテ出づ

次第にワキの僧出て。「花をもうしと捨つる身の。〳〵。月にも雲は厭はじ」を歌ひ。名乘ありて此度西國行脚に出づる趣を述べ。まづ城南の離宮に趣き。山崎關戸の宿を過ぎて。芥川。猪名の笹原。昆野の池。有馬山。など名所々々を跡になし。須磨のほとりに着きたるよしの謐ありて。脇座に下に居ると笛ひしぎありて一聲となる。かくて出て來るシテは柴とる翁の心にて。左に木の葉を持ち右に杖を突きたり。替にては。負柴に櫻の作花をさしそへて脊負ひ出づる事もあり。此方いかにも優美に見ゆ。

仕手柱にて足を留め。「げに世を渡る習とて。かく憂きわざにもこりずまの。汲まぬ時だに鹽木を運べば。ほせども隙は馴衣の。浦山かけて須磨の海」と歌ひ。それより須磨の浦のさびしき有様。山陰なる

ワキとの問答

初同

一木の櫻の事など述べて。「是は或人のなき跡のしるしの木なり。殊更時しも春の花。手向のために逆縁ながら。足引の山より歸る折毎に。新に花を折り添へて。手向をなして歸らん」と正面に出て。下に居て合掌の形をなし。立ちてくつろぎ仕手柱にて正面向くと。ワキ「いかに是なる老人。お事は此山賤にてましますか」と問ふ。シテ「さん候此浦の海人にて候」と答ふ是より海人ならば海に住むべきを。山に通ふは山人とこそいふべけれと詰り。されども海人の汲む鹽は燒かで其まゝ置くべきならねば。鹽木にすべき柴の必要なるを辨じ。「柴といふものゝ候へば。鹽木のために通ひくる」と少し前に出てゝ。「あまりに愚なる。御僧の御說かなやな」とワキに向ひ語る心なり。「げにや須磨の浦。餘の處にやかはるらん」と　右受けて浦のけしきを見渡し。「それ花につらきは。峯の嵐や山おろしの」と。高く見上げて峰の嵐を思はせ。「音をこそ厭ひしに。須磨の若木の櫻は海すこしだにも隔てねば」と左に廻りて。又脇正面受け。須磨の浦を見わたし。「通ふ浦風に山の櫻も散るものを」と。上より下に山の散りくるを見おろしつゝ。杖を胸に當てゝ靜かに休む心を示す。負柴に花を添へて脊負ひたる時は。此時おろして下に居り杖を肩にもたせて休む形をするなり。いつも見る毎に畜にもかゝばやと思はるゝ所ぞかし。

ワキは日の暮れたれば一夜の宿を貸してよと請ひ。シテは花の陰に優る御宿はあるまじと答へ。花の宿には誰をあるじと定むべきぞと問ひ。行き暮れて木の下陰を宿とせば。花や今宵のあるじならましと。ながめし人は此苔の下なるを。我等がやうなる海人にてすら。常に吊ひ申すなるに。御僧は何とて吊ひ給はざるぞと詰る。此「ながめし人は此苔の下」といふ文句の處にて。前に木の葉を置きたる處を見るは。忠度の墓を敎ふる心と知るべし。

ワキは此歌を聞きて忠度の名を思ひ出で。シテは其一の谷の合戰に討たれし人なるを語り。○是ぞ即ち忠度のゆかりの人の植ゑ置きたる墓じるしの木ぞと示し。地になりて「名もたゞのりの聲きゝて」と眞ン中にゆきて下に居り。杖を置きて扇持つ。謠の間に後見杖を取りすつるもあり。立つ時ふたゝび杖を持ちて中入するもあり。

中入

「御僧にとはれ申さんとて。是まで來れりと」とワキを見込み。「夕べの花の陰に寐て」と立ちてくつろぎしが。再び立ち歸りて。「都へ言づて申さんとて。花の陰に宿木の。ゆく方知らずなりにけり」とワキへ詰足して。右へ廻り開きて。返しに靜に中入す。夕風ぞむき須磨の浦わに。旅僧ひとり殘され居るを見るなり。

例の如くアヒ出てゝワキと問答し。聞き及びたりといふ處の物語をなす。其あらましは左の如し。

アヒ

アヒ「かやうに候ものは。津の國須磨の浦に住居するものにて候。此間は何方へも出てず候間。今日は浦へ出て。心を慰み申さばやと存じ候。又若木の櫻も盛なるよし承り候程に。ながめ申さばやと存ずる。やあ。是なる御僧は。此あたりにては見なれ申さぬ御方にて候が。何とて是には御座候ぞ。ワキ「是は西國行脚と志す僧にて候。御身は此あたりの人にて御座候か。アヒ「中々此あたりの者にて候。ワキ「左樣に候はゞ。少し尋ねたき事の候間。近う來りて給はり候へ。アヒ「畏つて候。さて御尋ね成されたさとは。如何程なる御事にて候ぞ。ワキ「近頃存じよらざる申事にて候へども。薩摩守忠度の討死なされたる御事。又若木の櫻の子細。御存じに候はゞ語つて御聞かせ候へ。アヒ「是は思ひもよらぬ事を御尋ね候ものかな。我等も此處に住み候へども。左樣の事くはしくは存ぜず候。さりながら凡そ承りたる通。御物語申さうずるにて候。ワキ「近頃

にて候。やがて語られ候へ。

アヒカタリ「さる程に薩摩の守忠度と申したる御方は。歌道を詮となされたると申すが。此所へ御出の折節。俊成の卿に仰せられ候は。千載集を撰じ給はゞ。其御人數に御入り有りたきよし御申し候へども。其頃平家勅勘の御事なれば。叶まじいよし仰せられ候へども。此所へ御下りの時。山崎へんとやらんより。御馬を引き返し。俊成卿に色々御頼み候へば。千載集を撰じ給ふ時。忠度の御歌をも一首御入申し候へども。其頃平家は勅勘の故。よみ人知らずと御座有りたると申す。さる程に。此所にて討死なされたる樣体は。範頼義經を大將軍にて六萬餘騎を二手に分け。大手の大將には範頼なり。五萬餘騎にて。生田の森と申す所へ押し寄せ給ふ。義經は搦手より一萬餘騎にて。二月七日の曙に。鵯越を逆落しに成され。平家の御本陣へかゝり給ふ程に。平家取る物も取りあへず候處に。又生田の森の大手より攻め入れば。御一門の人々も討たれ給ひ。或は御船にめして。四國西國の方へ落ち給ふ。薩摩の守忠度は。西の手の大將軍にてゐはしますが。御本陣より破れたる事なれば。是非に及ばせ給はず。雜兵の落つるに打ちまぎれ。しづ〳〵と落ち給ふ處に。岡部の六彌太これを見て。そこへ落ちさせ給ふは。まさしく大將と見えてある。御返しあれと申す。忠度にくい奴めが振舞かなとて。取つてかへし。馬の上にてむずと組み。馬より下にどつと落つ。取つて押さへ首とらんとし給ふ處に。六彌太が郎等馳せ來り。うしろより忠度の。右のかなひを打ち落せば。薩摩の守今は叶はじと思召し。左の御手にて。六彌太を取つて投げのけ。西に向ひ念佛唱へさせ給ふところを。六彌太御首を討ち落し申し。これを

見る人毎に。涙を流し申したるよし承り候。また若木の櫻は。忠度の御舊跡に植ゑ給ふと申すが。又一説にはそれより初から。御座ありたるとも申す。まづ我等の承り及びたるはかくの如くにて候。さて唯今の御尋は如何さま不審に存じ候。ワキ「ねんごろに御物語祝着申し候。尋ね申す事餘の儀にあらず。御身以前に老人一人來られ。若木の櫻の子細ねんごろに語られ。其後花の陰にて二姿を見失ひ候間。不審に存じ。かたゞに尋ぬる事にて候よ。ア「是は不思議なる事を承り候ものかな。それは疑ふ所もなき。忠度の御亡心にて御座あらうずると存じ候。お僧も左樣に思召し候はゝ。暫く御逗留なされ。忠度の御跡を。ねんごろに御弔あれかしと存じ候。

とて立つと。

ワキ詞ありて待謠となる。「夕月はやくかげろぶの。〳〵。おのが友呼ぶ村千鳥の。跡見えぬ磯山の。夜の花に旅寐して。浦風までも心して。春に開けばや音凄き。須磨の關屋の旅寐かな。〳〵と。夜に入りてさびしくなりゆく旅寐のさまを歌ふと。一聲になりて後ジテ出づ。

後ジテは中將面に梨子打烏帽子を着し。身には半切に法被を纏ひて右の肩を脱ぎ。そびらに短冊つけたる矢を負ひて。生前の薩摩守武裝して來れる姿を示せり。仕手柱に立ちて。「耻かしや亡き跡に。姿をかへす夢の內。さむる心は古に。迷ふ雨夜の物語。申さん爲めに魂魄に。移りかはりて來りたり。さなきだに妄執多き婆婆なるに。何なか〳〵の千載集の。歌の品には入りたれども。勅勘の身の悲しさは。よみ人知らずと書かれし事。妄執の中の第一なり。されどもそれを撰じ給ひし。俊成さへ空しくなり給へば。御身は御內にありし人なれば。今の定家君に申し。然るべくは作者をつけてたび給へ

謡曲出陣の書み語る

と。夢物語申すに」と。歌ひながら真ン中に行き。「須磨の浦風も心せよ」と。須磨の浦風を見わたす心にて指し廻し。下に居ると。地はクリを歌ひ出だす。

「年は春永の秋の頃」と立ちて。「都を出てし時なれば」と詰足するは。都を立ち出づる心なるべし。「さも忙がはしかりし身の」と据拍子二つ踏み。打切ありて。「心の花か蘭菊の」と仕手柱の方へ行きかけて。「狐川より引きかへし」と足を引き跡戻りする心にて正面へ出て。「歌の望を嘆きしに」と開き。「望足りぬれば。又弓箭に携はりて」と。角取りて左へ廻り。大小前小廻りして。「暫しと頼む須磨の浦」と正面へ開き。「源氏の住所。平家のためはよしなしと」と拍子ふみて左右打込。「知らざりけるぞよしなき。」と舞ひ留め。「さる程に一の谷の合戦」と氣をかへて。扇ひらき橋掛一の松まで行きて。正面先に播磨灘を見わたしたる心にて。「みな〳〵船に取り乗つて海上に浮ぶ。」と雲の扇して開き面をつかふ。さるほどによりこゝまでは合戦の有様を傍より見たる姿なり。

「われも船に乗らんとて」と。舞臺に入り。脇柱の方に兵船を見つけたる心にてつか〳〵と進みしが。「後を見れば」と仕手柱の方を振りかへり見ると岡部の六彌太の追つかけ來りし處を學ぶとて。兩手ひろげて仕手柱の方に追ひゆきしが。又忠度になりて。「是こそ望む處よと思ひ」と。少し左の方に乗りたる駒の鬣を見つけ。「駒の手綱を引つ返せば」と。兩手にて手綱をとらへ左へ一まはりし。「六彌太やがてむづと組み」と。目附柱の方に六彌太を見つけて走り寄り。扇を高く上げて組み合ふ形をなし。そりがへりして「兩馬があひにどうと落ち」と膝を突き。「かの六彌太を取つて押へ」と組み伏せ左の手にて押しつけ。「すでに刀に手を掛けしに」と。太刀の柄に手を掛くる形をなしたるが。「六彌太が郎等。御うしろより立ち廻り。上にましま

す忠度の。右の腕を打ち落せば」と。右の手を下げて切られたる心を見せ。「左の御手にて六彌太を取つて投げのけ」と。左にて六彌太を投げ出す形ありて。「今はかなはじと思召して」と。べたりと平座し。「そこのき給へ人々よ」と右の方に面つかひ。「光明遍照十方世界」と。左にて片合掌して最期の念佛をなし。「御聲の下よりも。痛はしやあへなくも。六彌太太刀を抜き持ち」と。合掌の手をおろし又六彌太の心になりて。扇を太刀の如くに出だし見て。「遂に御首を打ち落す」と高く上げて我首を指す。かくて「六彌太心に思ふやう」と歌ひながら。猶六彌太の心にて膝を直し。「痛はしや彼人の。御死骸を見奉れば」と。跡へ下りて忠度の死骸を正面の方に見る心あり。「其年もまだしき。長月頃の薄曇降りみ降らずみ定なき」と。右の方を高く見て。「時雨ぞ通ふ村紅葉の。錦の直垂は。唯世の常によもあらじ」と。又もとの死骸の處を見て下に居り。「いかさま是は公達の。

御中にこそあるらめと。御名ゆかしき處に」と。立ちてくつろぎ。脊なる矢を拔き出だして仕手柱に立ち。箙を見れば不思議やな」と。矢に附けたる短冊を右の手に持ちて見。「見れば旅宿の題をすゑ」と讀む心にて。「行き暮れて。木の下蔭を宿とせば」と右乘り込み柏子ふみ。立廻りありて。角取り左に廻り。仕手柱にて小廻りし。又矢を出だし短冊を見て。「花や今宵のあるじならまし」と歌ひ。「忠度とかゝれたり」と讀み終りて。「さては疑ひ嵐の音に」と指し分けして右に廻り。「聞えし薩摩の守にてますぞ痛はしき」と兩手打ち合はせて矢を捨て。下に居て打ちしをる。表面は六彌太が同情の涙。裏面は忠度が昔を悟る懷舊の涙なるべし。

「御身此花の。陰に立ち寄り給ひしを。かく物語り申さんとて。日を暮らし留めしなり」と。又忠度の身に立ちかへりてワキに向ひ。「今は疑ひよもあらじ」と拍子ふみ。「花は根にかへるなり」と。正面へ胸ざしゝて出て。右にまはりて正面むき。「木陰を旅の宿とせば花こそあるじなりけれ」と。雲の扇して開き。例の如く袖かへし。留拍子ふみをさむ。平家の公達なる上に和歌の名人たり。頭は花の盛にして地は須磨の名所なれば。一たび此能を見聞く人。いかでか優に昔戀しき心を起さて止むべき。

替之形としては。「さも忙がはしかりし身の」の返しに橋掛一の松あたりまで行き。「狐川より引きかへし」と足を引きて舞臺に立ち戻り。「俊成の家にゆき」とワキへ開きたるを見し事あり。その時は「さる程に一の谷の合戰」と橋掛へ行かずして。舞臺先へ出て雲の扇して開きたりき。

松風

作物　松　車

シテ　松風
若女　葛　葛帶　箱　腰卷　腰帶　白水衣　扇　物狂の後
長絹　小烏帽子
ツレ　村雨
若女　葛　葛帶　箱　腰卷　腰帶　白水衣　水桶持つ
ワキ　旅僧
角帽子　熨斗目　水衣　數珠　扇さす
アヒ　處の者
長袴上下　小サ刀　扇

むかし在原行平といひし人。故ありて須磨の浦に三年の月日を送りける時。松風村雨といふ二人の海人乙女を召し使ひ寵愛しけるが。行平都に歸りて後。二人物狂となりて戀ひ慕ふ心を。後日に幽靈あらはれ旅僧に物語る意味の能なり。三番目に用ふる鬼物の一つにて太鼓なし。季節は秋。地は播磨。

三拍子座に着くと松の作物を舞臺の正面に出だす。白紙の短冊を結びつくる事もあり。結びつけざる時は結びつけてある心と知るべし。ワキの僧出て〻名乘す。「是は諸國一見の僧にて候。我いまだ西國を見ず候程に。此度おもひたち西國行脚と志して候」と。先づ目的を述べ。「あら嬉しや急ぎ候程に。是は早津の國須磨の浦とかや申し候」とて。着きたる事をいひ。「又是なる磯邊を見れば。やう有りげなる松の候。いかさま謂れの無き事は候まじ。此あたりの人に尋ねばやと思ひ候」と。松を見て不審し。橋掛の方に向ひ。「所の人の渡り候か」と呼び出だすと。アヒは狂言柱より立ちて。「處の者との御尋は如何樣なる御用にて候ぞ」と問ふ。ワキ「是は諸國一見の僧にて候が。

松の謂を問ふ

此浦はじめて一見の事にて候。又あれなる磯邊に一木の松の候に。札を打ち短冊を附けられて候。如何樣いはれのなき事は候まじ。敎へて給はり候へ。」　アヒ「さん候あれは古へ。松風村雨と申して。二人の海人の御座候が。其乙女の舊跡にて候。今も心ある御方は。札を打ち短冊を附け。吊ひて御通り成され候。御僧も逆緣ながら吊らうて御通り候へ。ワキ「御敎へ祝着申し候。さあらば立ち越え吊らうて通らうずるにて候。」この問答すみてワキは作物の前にゆき。「さては此松は。古へ松風村雨とて。二人の海人の舊跡かや。痛はしや其身は土中に埋もれぬれども。名は殘る世のしるしとて。かはらぬ色の松一木。緣の秋を殘す事のあはれさよ」と歌ひ。かやうに讀經念佛して吊ふ程に短き秋の日も暮れたれば。是なる海人の鹽屋にて一夜を明かさばやと獨言して。脇座にゆき下に居る。鹽屋のあるじの歸りなば賴みて宿を借らんと待ち居るさまなり。

作物出をだす

右の脇僧いて、直に名乘るは上懸にて。下懸は次第にて出て。名乘の前に。「須磨や明石の浦づたひ。〳〵。月もろともに出てうよ」の文句あり。

ワキ着座すると車の作物を日附柱の方へ出だす。車の上には水桶二つ載せおく流儀もあり。又は一つ載せて一つはツレが手に持ち出づるもあり。此車は後見が兩手に持ち。本幕あげて橋掛より出だす事なるが。流儀によりて。一聲の前に皷あしらひにて出だすもあり。又は一聲になりてから出だすもあり。

眞の一聲

シテの出づる一聲は眞の一聲とて。高砂などの如く。位重きものに用ふるなり。ツレまづ出て。シテ次に出て、橋掛にて向き合ふ。共に腰卷して白水衣の肩を取り。汐汲みに出てんとする海人のいでたち。シテは扇を持ち。ツレは觀世流などにては水桶を提げたり。一聲に靜め頭などいふ皷の手ありて。シテツレ同じく詰足し。同音に

舞臺に入る

初間

て「汐汲車わづかなる」を歌ひ出だす。「波こゝもとや須磨の浦」はッレ正面向きて歌ひ。「月さへぬらす袂かな」と又同吟にて向き合ふ。趣あるところなり。此あと二人とも舞臺に入り。ッレは眞ン中に。シテは仕手柱先に立ちて。シテ正面むき。「心づくしの秋風に。海は少し遠けれども。かの行平の中納言」と歌ひ。「關ふきこゆるとながめ給ふ。浦わの波のよるゝは。げに音近き海人の家。里離れなる通路の。月より外は友もなし」と同吟して。我すむ里のさびしさと我ゆく道のさびしさとを述べ。シテ又「げにや浮世のわざながら。殊につたなき。海人小舟の」と歌ひ。「わたりかねたる夢の世に。すむとやいはんうたかたの。汐汲車よるべなき。身は海士人の袖ともに。思ひを干さぬ心かな」と同吟し。わがなす業の心細くたよりなきを嘆きたる後。地になりて。「かくばかり經がたく見ゆる世の中に。渋ましくもすむ月の。山汐をいざや汲まうよ」と。まづ汐汲まんとする心をあらはし。渚に立ちよりては見たれど。うつれる我影のあさましさを耻ぢ。日影にも消え失すべき露の身をかこちなどしたりしが。あまりにも月のよければ。「面白や馴れても須磨の夕まぐれ。海人の呼聲かすかにて」と。シテ歌ひて其けしきの唯ならぬに見とれたる趣あり。こゝらの處。あるは嘆き或は慰み。その感情のうつりかはりを見するなど。面白き文章なるを味はざるべからず。シテの形には。「影はづかしき我姿」と面曇らし。又「朽ちまさりゆく袂かな」と曇らす心あり。かくて又處から折からのあはれ身に集まりて。「野分汐風いづれもげに。かゝる處の秋なりけり。あら心すごの夜すがらやな」と。ながめ居たりしが。俄に心づきて。「いざ〳〵汐を汲まんとて。汀に滿干の汐衣の」と。シテ歌ひながらッレと向き合ひ。袖を結んで肩に掛け」とッレ歌ひ。「汐汲む爲めとは思へども。」とシテ歌ひ。「よしそれとても」とッレ歌ひ。「女ぐるま」とシテ歌ひて詰足

し。地受取りて「よせては歸るかたをなみ」と心掛けて歌ひ。打切あり て返しに二三足出て。「蘆邊の。田鶴こそは立ち騒げ」と。一の松の下あたりより飛び立つ鶴を目附柱の方にながめやる心にて面使ひ。四方の嵐も音そへて。夜寒なにと過さん」と。正面に直して面を下げ。「更け行く月こそさやかなれ」と。目附柱の方を見て月の西に傾かんとするをながめやり。「汲むは影なれや」と車の上の桶を見て「焼く鹽烟こゝろせよ」と遠く鹽焼く烟を思ひやる心にて正面へ顔直す。「さのみなど海士人の。うき秋のみを過さん」と打切になりて。シテ車の前に進み下に居て扇ひらき。「松島や雄島の海人の月にだに。影を汲むこそ心あれ」と。右の方を渚の心にて一つ汐を汲み。車の上なる桶にすくひ入れ。又一つ同じやうに汲みて桶に半分ほど入れたるが。一ぱいに満ちて月のおもしろく浮べるに見とれたるなど。文句の外なる味までも能にては掬し得らるゝ妙處ぞかし。

汐を汲む

ロンギ

打切にて扇たゝみ立ちて仕手柱先にゆくとロンギとなる。「遥ぶは遠き陸奥の。その名や千賀の鹽釜」と地うたひ。「賤が鹽木を運びしは。阿漕が浦に引く汐」とシテ歌ひ。「其伊勢の。海の二見の浦。ふたゝび世にも出でばや」と地うたひ。「松の村立かすむ日に。汐路や遠く鳴海潟」とシテ歌ひて右のかたに遠く見やる心あり。「それは鳴海潟。こゝは鳴尾の松陰に。月こそさはれ蘆の屋」と地の謠にてシテ正面直し。「なだの汐くむうき身ぞと。人にや誰も黄楊の櫛」と地にて歌ひ。汐汲の名所々々を吟じすさびつゝ立ち居るは。今しも汲み入れたる汐を車に載せて運び歸らんとする道すがらの唱歌なりと知るべし。

「さしくる汐を汲み分けて。見れば月こそ桶にあれ」と。ツレ進みて車の前に至り。おのれも汐を汲みたる心にて持ちたる桶を車に載せ。その長柄に附きたる綱を引き伸ばし立ち居るシテに持たすと。

シテは左の手に持ちて。「是にも月の入りたるや」と向の桶に月のうつりたるを見。「うれしや是も月あり」と前なる桶に月のうつりたるを見。「月は一つ」と。前に「更けゆく月こそ」と見やりたる方角をながめ。「影は二つ」と又二つの桶を見て。「満つ汐の夜の車に」と大小前の方に車を引きゆき。「月を載せて」と振り返り桶を見て。「うしとも思はぬ汐路かなや」と。又少し引きゆく心にて。柏子ふみ留まる。

鹽屋に着く

鹽屋に着きて車を引き捨つる心なり。

車を引く

下懸にてはシテの出一聲の次に。「秋になれたる須磨人の。〳〵。月の夜汐を汲まうよ」の次第あり。二人にてうたふ。上懸にはなくして直に「心づくしの秋風に」となる上の如し。

シテ綱を捨て。後見車を持ちて入ると。シテ正面に少し出て床几に掛り。ツレ其右に下に居る。此松風のシテは其身賤しき海人なるに。床几にかゝること。傲慢不遜に似たりと評せし人。昔もありたれど。

そは能と實際とを區別せざる論といふべし。身は海人乙女にもせよ。行平朝臣の側女となりたる上は。その品位をもあらはさゞるべからず。又この能にては主たる位置を占むるものなれば。村雨と同等にすわらせんも如何なるべく。見たる處よりいひても。姉妹同じやうに舞臺にならび居らんも無恰好なるべければ。實際はともかくも。床几に掛けさせてシテの品位を見するは。能の能たる處ぞかし。

ワキ宿を借らんといふ

シテの几床にかゝるを見て。ワキ立ちて正面の方に向き。「鹽屋のあるじの歸りて候。宿を借らばやと思ひ候」と獨言し。シテとツレの居る方に向ひて案内を乞ふ。ツレ立ちて誰ぞと問ひ。ワキ一夜の宿を貸し給へといひ。ツレはあるじに取り次ぎ。あるじは見苦しき鹽屋なれば叶ふまじと答へよといひ。ワキ更に押し返して。「いや〳〵見苦しきは苦しからず候。出家の事にて候へば。平に一夜を明かさせて給はり候へと重ねて御申し候へ」といふを。ツレ一言に「いや

ワキ旅屋に入る

叶ひ候まじ」と言ひ捨てゝ座に歸らんとす。シテは之を「暫く」と呼び留め。月の夜影に見奉れば世を捨人。よし〳〵かゝる海人の家。松の木柱に竹の垣。夜寒さこそと思へども。蘆火にあたりて。むとまりあれと申し候へ」といはれて。ツレは入り給へといひ。ワキは鹽屋の内に入り着席する心にて下に居る。主客互に挨拶ありて。ワキはシテの情を謝し。「出家と申し旅といひ。とまりはつべき身ならねば。何くを宿と定むべき。其上此須磨の浦に心あらん人ば。わざともわびてこそ住むべけれ。わくらはに訪ふ人あらば須磨の浦に。もしほたれつゝわぶと答へよと。行平も詠じ給ひしとなり。又あの磯邊に一木の松の候を。人に尋ねて候へば。松風村雨二人の海人の舊跡とかや申し候程に。逆緣ながら吊らひてこそ通り候ひつれ。」と語りながら二人の涙を拭ひ居るを見て。「あら不思議や。松風村雨の事を申して候へば。二人ともに御愁傷候。是は何と申したる事にて

二人名のる

候ぞ」と問ひ掛く。

二人しをり居る手をおろしながら。「げにや思ひ内にあれば。色外にあらはれさむらふぞや。わくらはに訪ふ人あらばの御物語。あまりになつかしう候ひて。猶熱心の闇浮の涙。再び袖をぬらしさむらふ」といひて又泣く。

それよりワキは。「なほ執心の闇浮の涙とは。今は此世になき人の言葉なり。又わくらはの歌もなつかしいなどゝ承り候。かた〳〵不審に候へば。二人ともに名を御名のり候へ」といひ。二人は遂に隱しおふせずして。「松風村雨二人の女の。幽靈これまで來りたり」と名のり。行平にめされし昔の物語などして。「身にも及ばぬ戀をさへ。須磨のあまりに罪深し。跡とむらひてたび給へ」と一返の回向を乞ひ。更に懷舊の情に堪へざる心にてクセの文句となる。ツレは「跡とむらひて」の跡の打切に立ちて地の前にゆき下に居る。

「あはれ古を。思ひ出づればなつかしや。行平の中納言。三とせはこゝに須磨の浦。都へ上り給ひしが。此程の形見とて。御立烏帽子狩衣を。殘しおき給へども」といふ文句の内に。後見烏帽子と長絹とを持ち出てゝシテの左の手に持たすを。「これを見る度に。いやましの思草」と高く上げて見。持ち添へたるツヨを落し。「かたみこそ今はあだなれ是なくは」と又見て。「よみしもことわりや」と。梅若實は扇にて膝一つ打ちたる形をして。「なほ思ひこそは深けれ」と。扇持ちたる手にてしをりたり。但し膝打つ形は一度見たるのみなれば常にはせぬ事なるべし。

しをり返しながら「よひ〳〵に脱ぎて我ぬる狩衣」のアゲを歌ひ。立ちて「忘れがたみもよしなしと」と。長絹を見て。「取れば面影に立ちまさり」と右の手添へて長絹をかゝへるやうに持ち。「起き伏し分かて枕より。跡より戀の攻めくれば」と。右に廻り橋掛の方を振り

物著

返り見て。「せんかた涙に。伏し沈む事ぞ悲しき」と。跡へ下り安座して長絹を顔に當てしをる心あり。

こゝに物着あり。裝束着せ切戸より出てゝ。水衣を脱がせ長絹に小烏帽子着せて入ると。シテは作物の松を見上げて打ちしをり。「三つ瀬川絶えぬ涙の憂き瀬にも。亂るゝ戀の淵はありけり」と低音にて歌ひしが。俄に狂氣づきたるさまにて。「あら嬉しやあれに行平のお立あるが。松風と召されさむらふぞやいて參らう」と立ち上り。松をさして走せ行かんとするを。ツレ立ちて引き留め。「あさましや其御心ゆゑにこそ。執心の罪にも沈み給へ。婆婆にての妄執をなほ忘れ給はぬぞや。あれは松にてこそ候へ。行平は御入もさむらはぬものを」と諭し。シテ「うたての人のいひ事や。あの松こそは行平よ。たとひ暫しは別るゝとも。松とし聞かば歸り來んと。連ね給ひし言の葉は如何に」と論じ。ツレ「げにになふ忘れてさむらふぞや。たとひ暫しは別るゝとも。待たば來んとの言の葉を」と。遂におのれも心亂れて行平を思ひ。シテ「こなたは忘れず松風の。立ち歸りこん御音づれ」ツレ「つひにも聞かば村雨の。袖しばしこそ濡るゝとも。」シテ「まつにかはらで歸りこば」ツレ「あら頼もしの。」シテ「御歌や」と詰足して。「立ち別れ」の地になり。シテもツレもしをりながら。シテは橋掛にゆきツレは地の前にゆく。

狂の一段となる

イロエ掛り中の舞

笛のイロエありて一の松あたりより立ち歸り舞臺に入る。これをイロエ掛りと名づく。仕手柱先にて足とめそれより中の舞となる。舞のアガリは和歌にて。「いなばの山の峯に生ふる。まつとし聞かば。今かへりこん」と。前に出だしたる扇のけて開き。「それは因幡の遠山松」と遠く橋掛の於を見。「これはなつかし君こゝに」と。作物の松に胸ざしゝて。「須磨の浦わの松の行平」と右の方に面使ひして須磨の浦を見わたし。又作物を見て松の行平といふ文句を聞かせ。「立ち歸り

破の舞　キリ

こば我も木陰に」と右へ廻り。「いざ立ちよりて磯馴松の」と作物のそばに寄り。松に両袖かけて。「なつかしや」としをりながら跡へ下る。

是より破の舞になりて脇座の前まで行き。松を見あげて。その下葉をかきわくる心にて扇横に前へ出だし。身を屈めながら一まはりする形などありて。例の如く角へ指しかざし廻りて留むると。松に吹きくる風も狂じて」となり。招扇して出て。「須磨の高波はげしき夜すがら」と。右の方に波を見て指し廻し。「妄執の夢に見々ゆるなり。我跡とひてたび給へ」と。ワキに向ひ座して二人とも合掌し。「暇申して歸る波の音の」と。別を告ぐる心にて少しうつむきて立ち。波の音の響く心にて拍子ふみ。「須磨の浦かけて吹くや後の山おろし」と。笛柱の方をうしろの山の心にて抱扇しつゝ角柱をうしろにして見上げ。「關路の鳥も聲々に夢も跡なく夜も明けて」と東の方をながめ

やり。「村雨と聞きしも今朝見れば」と乗り込み。「松風ばかりや殘るらん。〈」と。例の如く拍子ふみ留むる。殘るは風か波の響か。ツレもシテも後影すでに幕の内に隠れて。橋掛を歸りゆく旅僧獨りさびしげなり。

梅若の舞臺にてしば〳〵見たる戯之舞を記憶のまゝに語らば。舞三段にて二段目までは常の如く。三段目の扇を逆に取るところ。常の如く取り直し破の舞のやうにして松を廻り。松につけたる短冊を持ちて「立ちわかれ」と歌ふ。常は此一句舞の前にありて。「和歌はいなばの山の」よりなれど。戯之舞の時は今一度此句を讀むなり。破の舞は抜けて。「暇申して歸る波の」の拍子ふみ直に橋掛にゆき。一の松にて「吹くやうしろの」と舞臺の方を高く見上げ。それより幕に入りて脇留にしたるもあり。又同じく橋掛にゆき二の松あたりにて足とめ。「松風ばかりや」

七騎落

と左に持ちたる扇を高く上げかざして。舞臺の松を見しづかに留めたる事もあり。此留方を見留の習といへり。喜多流にては。破の舞の間に松をまはり。直に一の松に來て袖かづき作物の松を見こむと笛ひしぎて留むるを見つ。同じ物にさま〳〵の形あるを比べ見て味ふ程おもしろきものなし。

七騎落

作物　舟

シテ　土肥次郎實平

直面　梨子打烏帽子　白鉢巻　厚板　牛切　法被　腰帶

太刀　扇

頼朝

シテに同じ。

田代(信綱)

シテに同じ。但し牛切法被は同じからず。火口側次を用ふ。

土屋(三郎宗遠)

新開(次郎忠氏)

田代に同じ、但し梨子打なく白鉢巻のみ。

土佐坊(昌俊)

直面　長絶頭巾　厚板　牛切　側次の上に水衣　腰帶

太刀　扇

遠平(子方)

田代の如し。

岡崎(四郎義實)

シテに同じ。但し梨子打の下に白垂を用ふ。

ワキ　和田(小太郎義盛)

シテに同じ。弓矢持つ。

アヒ　舟子

狂言上下　棹持つ。

源頼朝石橋山の戰破れて安房上總の地に渡らんとしつゝ小舟にて漕ぎ出だしたるに。數ふれば主從八騎なるを見て從來源家には不吉の例なりとし。一人おろして八の數をよけんとせしに。誰もおりんといふものなく。岡崎も遠平も拒んで聞かざれば。止むを得ず實平みづからおりんとせしを。さすがに遠平。父子の情として默する能はず。父に代りて上陸し。今や敵兵に圍まれて討死すとて。頼朝「主從ふびんに思ひ。その後影を遠くながめゐたるに。和田の小次郎舟こぎよせて。味方に參らんといふ。いまだ心の眞僞を明にせざれば。頼朝は此船に在らずと欺き和田は失望して切腹せんとし。誠あらはれて頼朝つひに和田に對面す。和田は船底に隱し置きたる遠平を出だして。討死すべかりしを救ひ得て連れ來りしなりといひ。父の實平酌に立ちて頼朝に酒をすゝめ。舞をまひて行末の祝言をなすといふ事を作れる能なり。現在物とて多くは四番目に用ひらる。太鼓なし。季節は歴史上にあらはれたるは八月なれど。文句の内にはあらず。

頼朝以下八騎出づ

處は伊豆より船出したる海上。

次第にて。頼朝。シテ。田代。新開。土屋。土佐坊。遠平。岡崎といふ順に出て。舞臺兩側に向ひ合ひ立ち並びて。「身は捨小舟うらみても。〳〵。かひなきや浮世なるらん」と歌ひ。地取すみて。頼朝正面むき名のる間は一同下に居る。「さても昨日石橋山の合戰に味方打ち負け。餘りに無勢に候程に。一先安房上總の方へ開かばやと存じ候」といひて。「いかに土肥の次郎」と呼ぶ。シテ「御前に候」と手を突く。頼朝「あまりに味方無勢にある間。一先安房上總のかたへ開かうずるにてあるぞ。急いで舟の事を申しつけ候へ。」シテ「畏つて

候。とくより御舟の事を申しつゝて候。急いで召されうずるにて候。是にて一同立ち。頼朝は脇座に床儿にかゝり。田代以下その次々に地の前より折れて大小前までに下に居る。是より船中の躰なり。シテは後見座にくつろぎ。更に出てゝ頼朝の前にゆくと。頼朝「いかに實平」と呼び掛く。シテ「御前に候」と下に居て手を突く。頼朝「唯今船中に供したる人數は如何程あるぞ」と問ふ。シテ「さん候唯七騎御座候」と答ふ。頼朝「さては頼朝までは八騎よな。きつと思ひ出だしたる事あり。祖父爲義鎮西へ開きし時も主從八騎。父義朝江州へ落ち給ひしも主從八騎。おもへば不吉の例なり。實平はからひて船より一人おろし候へ」と下知す。

シテ「畏つて候」といひて。「實平仰せ承り。舟のせがひに立ち上り」と歌ひながら立ち。立衆の並び居るに一々眼を配りて。「まづ一番には田代殿。」「さて二番には新開の次郎。」「又三番には土屋の三郎。」

岡崎との問答

「四番は土佐坊五番には。」「實平候六番には。」「同じき遠平。」「とも板には。」「義實あり」と。見わたしたれども。一人として君の御ために命を捧ぐる忠士ならぬは無ければ。「いづれを撰み出ださんと。さしもの實平思ひかね。赤面したるばかりなり」と。面伏せて跡へ下り下に居て困却せるさまをなす。

かくて頼朝よりは。何とて遅きぞといはれ。途方にくれて岡崎に船よりおりよといふ。岡崎船中にての一の老躰なれば御用に立つまじきとて左は言はるゝかと激し。いや左樣にてはなし。とも板に召されたれば陸の近さに申したりと辨解し。岡崎は所詮此船中にて命二つ持ちたる者をおろされよと勸告す。シテ其いはれを問へば。岡崎曰く。「昨日石橋山の合戰に。子にて候眞田の與一義忠は。副將軍を給はり。俱野と組んで討たれぬ。されば親子は一躰二つの命ならずや。見申せば土肥殿こそ。此御舟に親子一所に渡られ候へ。御分殘つて

遠平おるまじといふ

遠平をおろすか。遠平を殘して御分おるゝか。親子の内一人おりられ候へ」と。シテ此に於て一言する能はず。遠平に急ぎ御舟よりおりよと命ず。遠平いとけなけれど。君の御大事に立たん事は誰にも劣るまじければ。御舟よりおりまじと抵抗す。父怒れども手動かず。遂に人手には掛けまじとて刀の柄に手を掛くるを。岡崎「暫く」と留めて父子の中に分け入り。「是は君の御門出なるに。誤りたるか實平」といへば。「いづくまでも某が誤りて候。所詮おりまじきと申す者をおろさんより。某御舟よりおりようずるにて候」とて。橋掛の方へ行かんとするを呼び留め。「さらば某御舟よりおり候べし」と遠平いふ。實平喜びて立ちもどり。「げに〳〵今こそ某が子にて候へとて遠平を立たせ。橋掛へ連れゆき。「あれを見よ敵大勢打ち出てたり」とて一の松のあたりにて正面を遠く見やり。遠平に向ひて。「かまへて某が子と名乘つて。尋常に討死せよ。名殘こそ惜しけれ。」といひ

遠平かおろす

捨てゝ。「かくて我子をおろしおき。實平お舟に參りけり」と歌ひながら。實平は舞臺にかへりて遠平の居たりし跡へすわると。「ゆゝしく見ゆる實平かなと。互の心を思ひやり。親子の別れ痛はしや」と地にて歌ひ。遠平「父の別れは申すに及ばず」と舞臺の方に向ひ。「君を始めまゐらせて」と頼朝を見。「皆人々に御名殘こそ惜しう候へ」と一同を見る。地になりて。「かの松浦佐用姫が。もろこし舟を慕ひわびて渚にひれふしゝ有樣も。今遠平が親と子の別れにかはらじと。皆涙をぞ流しける」と。頼朝以下皆々面伏せ。遠平は頼朝の方を向きて。「契り程なき早舟を暫しとだにもいひあへず。跡を見おくりたゝずめば」と歌ひ。「早遠ざかる浦の波。立ち別れゆく有樣を」と地にて受け。「餘の人々は心して」と遠平歌ひ。「あはれみあへる」と地受け。「舟の内に」と遠平うたひ。「實平はひたすらに。弱氣を見えじとて。中々かへり見おきもせて。心づよくも行く跡に」と。シテは

ワキ出づ

氣を張り正面の方に直し居ると。「敵大勢みえたり。すはや遠平は討たるゝとて。頼朝もあはれみ。陸を見給へばさすがげに」と。頼朝は橋掛の方を遠く見やりてふびんと思ふ心あり。遠平は「かたき大勢」あたりにて後見座にくつろぎ居るなり。「恩愛の契も只今を限ぞと思ひ實平は。磯邊に向ひ人知れず心のまゝならば。あはれ遠平と一所に。討死せばやとあこがれて」と。今は最早堪ふる能はず。遠平の立ち居たる一の松の邊を遠く見て思ひ「やり。「飛び立つばかり思子の」と氣を引き立て居立ち見て。別ぞあはれなりける」と面伏せながら正面へ直す。鬼をもひしぐ大丈夫も。愛の爲めには涙なきにあらず。能を見てこゝに至らば腸寸斷せらるゝ思あるべし。

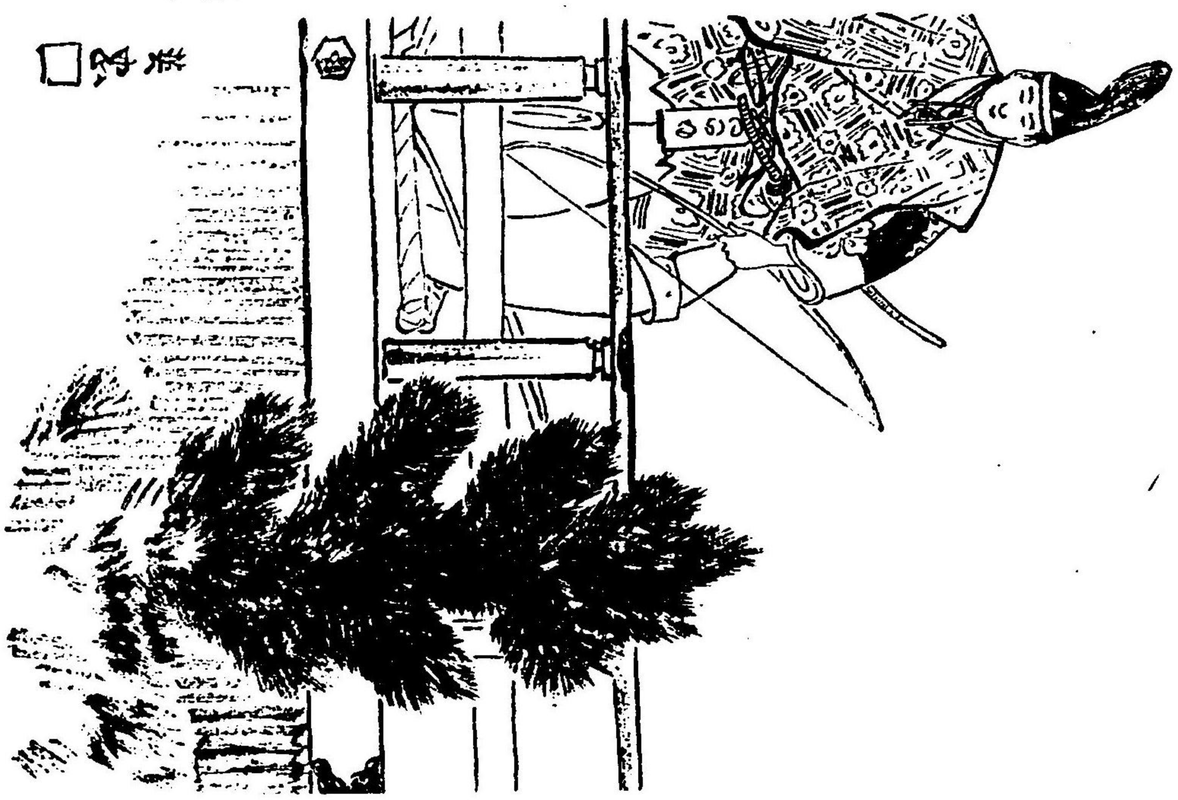
橋掛に舟出て。ワキ一聲にて之に乘り。狂言棹を取りて艪にあり。ワキは梨子打に法被半切の武裝して弓矢を持ち。「弓張月の西の空。ゆくへ定めぬ舟路かな」と歌ひ。「沖なる波の音までも。ときの聲かと恐ろしや」と狂言附く。かくて頼朝主徒の舟を見つけたる体にて。

シテ遠く舟を見つけて怪しむ

「あれに見えたるが御座舟にて有りげに候」とて急いて舟を漕げといふ。狂言畏つたるといひて漕ぎ近づけんとす。

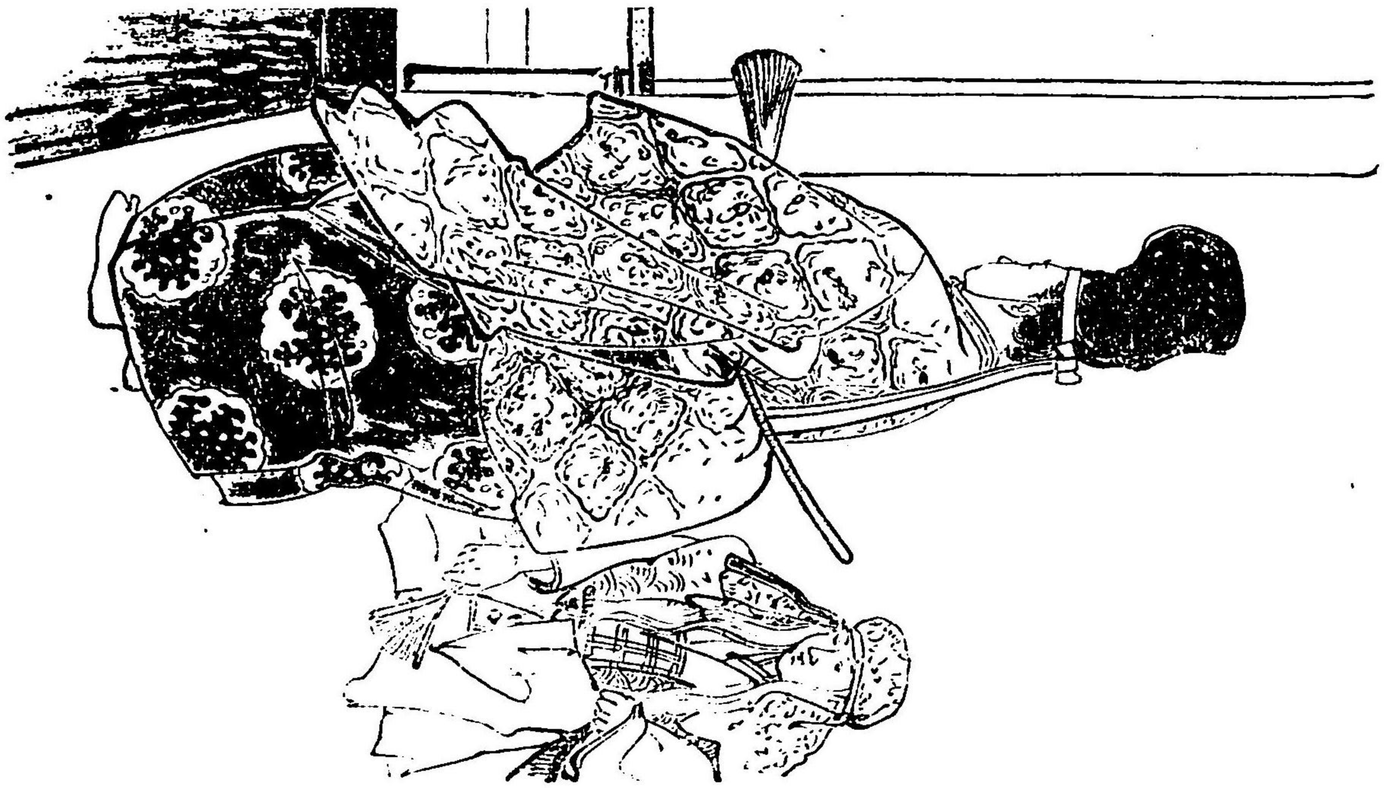
ワキとの問答

こなたにても敵の迫手もや來らんと心ゆるめぬ時なれば。狂言の謠の間にシテ立ちて。遠く橋掛なる舟を見とめ。少し立ちかへり岡崎に向き下に居て。「あれに兵船一艘みえて候。先こなたより言葉を掛けうずるにて候」といへば。「然るべう候」と答ふ。立ちて前の如く仕手柱内よりワキに向ひ。「いかにあれなる舟は誰が召されたる御舟にて候ぞ」と問ふ。ワキ又「我もそなたの船影を。怪しく思ひ休らふなり。そも誰人の舟やらん」と問ひ返す。シテ「是は土肥の次郎實平が乘りたる舟候よ。」ワキ「何と土肥殿の御舟と候や。」シテ「中々の事。さて其御舟は誰が召されたる御舟にて候ぞ。」ワキ「是こそ和田の小太郎義盛が乘りたる舟候よ。」シテ「さては和田殿の御舟にて候



善のうさぎ　川の像

五十七



五十八

か。」ワキ「中々の事。内々申し通ぜし如く。御味方に参らん爲めに是まで参りて候。さて君は其御舟に御座候か。」と問はれて。シテ獨言する如く正面に直し。「和田は内々申し合はせたる事の候間。只今まねりて候さりながら。先たばかつて心を見うずるにて候」といひて。又ワキに向ひ。「いかに和田殿へ申し候。是までの御參り目出度う候さりながら。面目もなき事の候。昨日の暮程より我君を見失ひ申し。かやうに浮れ舟を成りて尋ね候よ。」ワキ「何と君は其御座舟に御座なきと候や。」シテ「さん候。」ワキこゝに於て大きに望を失ひ。「言語道斷の事にて候ものかな。我味方をば忍び出て。月日とも頼み奉る頼朝には離れ申し。此上は命ありても何かせん。いて〳〵自害に及ばんと。腰の刀に手をかくる」と。弓矢を投げ捨て。どうと下に居て刀の柄に手をかくるを。狂言は兩手にて押し留め。シテは「あゝ暫く」と聲を掛け。「君は此舟に御座候」と實を明かす。是より問答かずか

頼朝の前に出づ

遠平あらはる

ずありて。雙方互に舟を着け。上陸して頼朝に見參せんとの相談とゝのひ。シテは立衆のならび座したる前に角掛けて着座し。ワキは扁を持ちて仕手柱先に出づ。是より陸上の體なり。

ワキ頼朝の前に兩手を突き。我君を見奉りて安堵したる由を述べ。シテに向ひて御子息遠平の見え給はぬは何故ぞと問ふ。さる謂れありて陸に殘しおきたる由を語れば。ワキ曰く。「とくよりかくと申したくは候ひつれども。以前某に心を盡させられ候其返報に今までは かくとも申さぬなり。いて土肥殿に引出物申さんと。隠し置きたる舟底より。遠平を引き立て見せければ」と。後見座なる子方を兩手にてかゝへ連れ來り。仕手柱先に立たせてシテに示せば。「その時實平あきれつゝ」と歌ひながら。「夢かうつゝかこはいかにとて」と。つと立ちて。「覺えず抱きつき泣き居たり」と。兩手ひろげつゝ遠平のそばへゆき。兩の肩へ兩手を掛けてすわらせ。自らもすわりて打ちし

ワキの詞リ

をる。親子の心中おもひやられて餘りあり。「たとへば仙家に入りし身の。半日の程に立ちかへり。七世の孫にあふ事の。たとへも今に知られたり」の間に。遠平立ちて始の居座にゆき。シテも立衆の前なる席にかへる。

それよりシテは遠平の是まで作なはれたる謂れを尋ね。ワキは頼朝の御前に於て申し上げんとて。「さても昨日石橋山の合戰破れしかば。大塲が手勢君を討ち奉らんと。大勢渚に打ち出てたりしに。某も一所に打つて出でしが。汀を見れば。引きかねたる若武者一騎ひかへたり。某駒かけよせて見れば御子息遠平なり。急ぎ馬より飛んでおり。生どる體にもてなし舟底に載せ申し。是まで作なひ參りたり」と語り。「なんぼふ土肥殿に義盛は忠の者にて候ぞ」など戯る。きのふの敵も今日の味方。打ち解けては隔なき丈夫の心事を見るべし。シテはかくと聞くより堪へずやありけん。「うれし泣の涙は。〳〵。何か包まん唐衣。日も夕暮になりぬれば」と。面伏せて落涙を隠すさまなりしが。俄に氣をかへて西の空を打ちながめ。日も入りはてたるを見て。「月の盃とり〳〵に」と。扇ひらきて銚子となし。「主從ともによろこびの」と頼朝の前に至りて酌をなし。又ワキの前にゆきて酌をなす。君臣の契をかたむる祝の心なり。

男舞キリ

ワキは目出度き折なればとシテに舞を所望し。「心うれしき酒宴かな」と舞になる。遠拜がゝりの男舞なり。觀世流にては恐之舞とてオロシなしにする事もあり。

舞すみて。「かくて時日をめぐらさず」と打切あり。「國々のつはものの馳せ參ずれば。程なく御勢二十萬騎になり給ひつゝ」と。指し廻して二十萬騎の兵を見わたす形ありて。「たな心にをさめ給へる此君の御代の」と頼朝に向ひて兩手つき。「めでたき始も實平たゞしき忠勤の道に入る」と頼朝を指すと。頼朝は立ちて橋掛へゆき。シテは其跡

ツレ立衆の入方

につき脇座にて受けて乗り込み。仕手柱にて拍子ふみ留め。扇たゝみて幕に入る時。田代以下順々に入るなり。但し頼朝さきに幕に入らずして。シテの跡より立ち他の立衆と共に入る事もあり。又シテ留拍子ふみて。扇たゝみ。ワキの次すなはち大皷の前あたりに下に居ると。頼朝先づ一人立ちて幕に入り。シテの前を通る時。シテ両手つき平伏し。其あとよりシテ田代新開と順々に入る事もあり。

山姥

前ジテ　里女　深井　葛　葛帯　唐織若流

ツレ　都女　女面　唐織若流

ワキ　従者　茶色上下　扇

ワキツレ二人　ワキに同じ。

後ジテ　鬼女　山姥　姥髪（習になれば白頭をも用ふ）　葛帯　箔　牛の角　唐織蛮折　腰帯　扇　鹿背杖　木の葉つくろ

アヒ　里人　狂言上下

都に百萬山姥といへる遊女あり。山姥の山めぐりするといふ事を曲舞に作りて歌ひゐたりしが。或時おもひたちて信濃の善光寺に参詣する途中。あげろの山といふ處にて道踏み迷ひ。誠の山姥なるものにあひて。其山めぐりする様を見る事を作れり。四

番目五番目にする能にて。太鼓あり。季節は知らず。地は越中。

シテは老いたる鬼女なれば位を重しとす。

ツレワキ次第にて出づ

次第にてツレを先に立てワキツレ(二人)出て。舞臺にて向き合ひ。「善き光ぞと影たのむ。〳〵。佛の御寺尋ねん」を歌ひ。ワキの名乘ありて。ひやくま山姥の善光寺へ參りたしとの事につき。唯今その供して善光寺へと急ぐ由を述べ。サシあり上歌ありて道すがらの事を歌ひ。都を出て〳〵近江を過ぎ。越前より加賀を經て。越中越後の境川に着きたるよしの詞ありて。狂言を呼び出だし。「境川の人の渡り候か」といへば。狂言柱より立ちて。「境川の者と御尋は何の御用にて候ぞ。」ワキ「是は都方の者にて候。是より善光寺への道を敎へて給はり候へ。」狂言「その御事にて候。是より善光寺への道あまた御座候中にも。上道下道あげろ越と申して御座候が。此あげろ越は。如來の踏み分け給ひたる道にて候により。己身の彌陀唯心の淨土に

狂言道を教ふ

たとへられ。此道を御參り候へば。如來の御内證に御叶ひなさるゝ道にて候。さりながら險難さかしき道にて候間。女房達など御供ならば。乘物などは中々叶はぬ道にて候。」ワキ「さらば御物語の通り伺ひ申さうずるにて候」といひてツレの前に行き。「善光寺への路次の樣躰尋ね申して候へば。道二つある由申し候。一つはあげろ越と申すは。己身の彌陀唯心の淨土にたとへられたる道にて候が。但し御乘物の叶はぬ由申し候」といへば。ツレは乘物を是に留め。徒歩はだしにてあげろ越を行くべしといひ。ワキ又狂言を呼びて道案内に頼み。「近頃祝着申して候。さらば御立ち候へ」と。ツレとワキと狂言と。舞臺に三つ鼎に立ちて山を越す躰なり。

狂言「御覽候へ我等の申したる如く。さかしき道にては御座なく候か。」ワキ「承り及びたるよりも險難に候よ。」狂言「此如くに御座あるによつて。乘物などは中々叶ひ申さず候。」というて空のけしきをな

シテ呼掛にて出づ

がめ。「あら奇特や何とやらん日の暮るゝやうなが。まづは奇特な事かな。」といひてワキに向ひ。何と思召すぞ。日の暮るゝやうには思召さぬか。日の暮時分にては御座ないが。俄に暗うなりて候」といへば。ワキも「あら不思議や。暮るまじき日にて候が俄に暮れて候よ。さて何と仕り候べき」といふ。狂言「とかう申す内に前後を辨へず候よ。あら苦々しい事かな」などいふ内に。シテ幕上げて。「なふなふ旅人お宿參らせうなふ」を呼び掛け。「是はあげろの山とて人里遠き所なり。日の暮れて候へば。わらはが庵にて一夜を明かさせ給ひ候へ」といひつゝ出て來る。ワキ之を見て。「あら嬉しや候。俄に日の暮れ前後を忘じて候やがて參らうずるにて候」といふ内に。狂言は座にかへり。シテは舞臺に入り。ツレは脇座に。ワキは其下に。シテは眞ン中にすわり。「今宵のお宿參らする事。取り分き思ふ子細あり。山姥の歌の一節うたひて聞かさせ給へ。年月の望なり鄙の思

主客座定まる

山姥の一節を所望す

出と思ふべし。其爲にこそ日を暮らし。御宿をも參らせて候へ。如何樣にも歌はせ給ひ候へ。」と所望す。

ワキ答へて。思ひもよらぬ事なるが。誰と見て左は申さるゝぞと問ひ返す。シテ曰く。あれなる御方は百萬山姥とて隱なき遊女ならずや。その作られたる歌の次第に。よし足引の山姥が山めぐりすると

あるは面白し。されど誠の山姥といふものを知り給へるかと。ワキ曰く。山姥とは山に住む鬼女なるべし。シテ曰く。よし鬼なりとも人なりとも。山に住む女といへば我身の上には候はずや。常に山姥の事を歌ひつゝ世を渡り給ふ御身として。誠の山姥の事を心にも懸け給はぬは。恨めしき次第なり。さらば舞歌音樂の妙音を奏して佛事をもなし。誠の山姥を吊らひ給はんこそ。わらはが希望する處なれとて。身は山姥の靈鬼なるよしを述ぶ。ツレは遂に辭する能はずして歌はんとすれば。今しばし日の暮るゝを待ちて。月の夜聲に歌

中入

アヒ山姥の事を語る

ひ給へ。その時我も誠の姿をあらはさんとて。「すはやかげろふ夕月の」と橋掛の上を西の山の端の心にて見やり。「暮るゝを急ぐ深山邊の。雲に心を掛け添へて」と立ち。「かきけすやうに失せにけり」と小廻し開きて。返しに靜々と中入す。

狂言立ちて「いや又かつ〳〵と成つて御座あるよ」といひてワキの前に出て。「いかに申し候。又かつ〳〵と成つて御座ある。」ワキ「さて此所にてかやうの事は有る事にてあるか。狂言「其御事にて御座ある。くはしうは存ぜぬ去りながら。山姥と申すものが寒い時は御座ない物かと存ずる。暖かに御座あれば。山姥が子を產んだ物ぢやと申し候。その上山姥には鳴瓜が成ると申し候。ワキ「さて其いはれの候か。狂言「中々子細の御座候。耳には茸がなり。鼻にはおひめぐるみがなると申し。目にはどんぐりがなると申し。髮には根芹の久しうなりて黃色なるが成ると申し候。手には毬打がなると申す。それによつてきつちやうかひなと申す。さて足には桶の輪がなると申す。是もかう御座あらう事には。わに足と申す程に是がなり申さうと存ずる。ワキ「いや左樣の者はなるまじく候。狂言「是もなり申すまい。何やらがなると申す。藤こぶがなると申す。ワキ「其いはれは候。狂言「其事にて御座ある。藤こぶと申すものに。松脂がやにくり〳〵ついて。それに木の葉が取り付きまゐらせて。目口が出來まゐらせて。是がなると承り候。や。思ひ出だして候。只今の女が申すやうは。山姥の歌の一ふしを歌ひ給へ。誠の姿をあらはして。移舞を舞はうずると申した程に。一ふし御所望なされ候へ。我等此所にて姿を見まゐらせうずるにて候。

と語り終り。定文句のワキと問答ありて狂言は狂言掛にくつろ

後ジテ出

ぐと。ツレ「餘の事の不思議さに。更に誠と思はぬ。鬼女が詞を違へじと」と歌ひ。ワキとワキヅレと同音にて。「松風共に吹く笛の。〈。聲澄みわたる谷川に。手まづさへぎる曲水の。月に聲澄む深山かな。〈」の待謠あり。一聲になりて後ジテ出づ。位靜なり。後ジテは誠の山姥の姿をあらはしたる心にて。鹿脊杖を突き。一の松に立ちて正面の方むき。「あら物凄の深谷やな。あら物凄の深谷やな」と。寂寞たる深谷のけしきを見わたす心ありて。「寒林に骨を打つ。靈鬼泣く〈前生の業を恨む。深野に花を供ずる天人。返す〈も幾生の善を歎ぶ。」と歌ひ。「いや」と悟りたる心にて右を受け。「善惡不二。何をか恨み。何をか歎ばんや」と又正面に直して。萬箇目前の境界。懸河渺々として巖嶋々たり。山また山」と胸杖して。向の方に山を見上ぐる心あり。「いづれの工か。青巖の形を削りなせる」と左右を見わたして其天工を賞しつゝ。「水また水。誰が家にか碧潭

舞臺に入る

の色を染め出だせる」と舞臺にしづ〳〵と入る。

ツレ之を見て。「恐ろしや月も木深き山蔭より。其さま化したる顔ばせは。其山姥にてましますか。」シテ「とても早はに出でそめし言の葉の。けしきにも知ろしめさるべし。我にな恐れ給ひそとよ。」

ツレ「此上は恐ろしながら烏羽玉のくらまぎれより現はれ出づる。姿言葉は人なれども。」シテ「髪にはおどろの雪を戴き。ツレ「眼の光は星の如し。」シテ「さて面の色はさにぬりの。」シテ「軒の瓦の鬼の形を。」ツレ「今宵はじめて見る事を。」シテ「何にたとへん古の」是より地となり。又山姥の一曲を早々うたひ給へとシテの所望する詞ありて。シテ遂に歌ふ事となる。次第にて地のうたふ「よし足引の山姥が。〳〵が。山めぐりするぞ苦しき」は。其歌の曲を代吟せるものと知るべし。

此次第の地返しにシテ〳〵つろぎ。杖を後見にわたし。扇持ちて出て。

床几にかゝる

クセ

「それ山といつぱ。塵ひぢより起つて」のクリを歌ひながら。眞ン中に行き。床几に掛る。是より謠いろ〳〵ありて。サシとなりクセとなる。クセは殊に此曲の中の謠ひ處。聞き處。舞ひ處。見處なれば。味おほし。

まづ「法性峰そびえては。上求菩提をあらはし」と右の方を高山の心にて見上げ。無明谷深き裝は。下化衆生を表して」と拍子ふみ。「金輪際に及べり」と。扇逆手に取りて下を低く指したる時は。舞臺の下。幾百千尺の穴が墜たれしかと。梅若實のを見て思ひたる事ありき。

打切にて床几を離れ。之より立ちて舞ふ。みづからも約束の如く。山めぐりのさまを舞に仕組みて見する心なり。「そも〳〵山姥は。生所も知らず宿もなし」と拍子一つ蹈み。「たゞ雲水を便にて。到らぬ山の奥もなし」と開き打込などありて扇ひろげアゲとなり。「然れば

人間にあらずとて」と扇のけて開き。それより大左右など例の如くありて。角の方より木きく廻り來り。仕手柱に出てゝ。「佛あれば衆生あり」と橋掛の方を一つ見。「衆生あれば山姥もあり」とイウケン扇して正面へ開き。「柳は綠花は紅の色々」と抱扇して柳櫻をながめやる心あり。「さて人間に遊ぶ事」と氣も浮き〳〵と拍子を踏み。「ある時は山賤の。樵路に通ふ花の陰。休む重荷に肩を貸し」と。扇を右の肩に上げて薪を荷なふ樣をまねび。「月もろともに山を出て。里まで送る心あり」と。正面に高く月を見ながら橋掛の方を麓の里の心にて二三歩すゝみゆく。求めずして興趣目前に浮び出づべし。「又ある時は織姫の。五百機立つる窓に入つて。枝の蕊糸くり。紡績の宿に身を置き」と。機織る音に擬したる乘込拍子。枝の蕊を見めぐる心の指し廻しなどありて。「人を助くるわざをのみ。賤の目に見えぬ。鬼とや人のいふらん」と。左右打込して第二段となる。斯くの如くアゲの二度あるクセを二段クセといふ。アゲとは此山姥にていはゞ。「然れば人間にあらずして。」「世を空蟬の唐衣」の如き。シテの歌ひつゝ開く文句をいふなり。

アゲの後は大左右打込かたの如く。「千聲萬聲の」と拍子を踏み。「砧に聲のしでうつは」と。兩手打ち合はせて砧を打つ心をあらはし。「たゞ山姥がわざなれや。都に歸りて。世語りにせさせ給へと。思ふは猶も妄執か」とツレに向きて語る心を見せ。「たゞ打ち捨てよ何事も。よし足引の山姥が。山めぐりするぞ苦しき」と。さしてかざし廻り再びツレに向ひて舞ひ留むると。太皷打ち出しありて。「足引の」とシテ歌ひ。「山めぐり」と地歌ひ。此謠の內に仕手柱までくつろぎて杖を持ち。カケリとなる。カケリは山めぐりするぞ苦しきの餘情を見する意味なり。

カケリすみて仕手柱に立ち。「一樹の陰一河の流。皆これ他生の緣ぞ

かし。ましてや我名を夕月の。浮世をめぐる一節も。狂言綺語の道すぐに。讃佛乘の因ぞかし」と。歌ひながらツレの前へ進み。杖を肩にもたせ下に居て。「あら御名殘をしや」と別の袖を分ちかぬる心あり。「暇申して歸る山の」と面伏せて立ち。杖捨て扇ひろげ持ちて。

「春は梢に咲くかと待ちし。花を尋ねて山めぐり」と。角とりまはり。「秋はさやけき影を尋ねて。月見る方にと山めぐり」と。正面に月を見ながら開き。「冬はさえゆく時雨の雲の雪をさそひて山めぐり」と。角にて扇かざしつゝ降りくる雪をながめ。「めぐり〳〵て輪廻を離れぬ妄執の雲の。塵つもつて山姥となれる」と。小廻り開き正面へ指し附け兩手を廣げて山姥の心をあらはすなど。いろ〳〵の形ありて。「鬼女が有樣みるや〳〵と峰に翔り。谷に響きて今までこゝに」と。谷を見おろす心にて乘り込んで飛びかへり。雲の扇して高く峰を見上ぐる形をなす。かの花傳書に。「山姥の峰に翔りといふ所は下

キリ

峰にかけり谷にひびきの形

を見。谷に響きといふ所は上を見る。皆人毎に峰といへば上を見る。習ゆかざる人のする事なり。谷にては又下を見る所なし。峰を見るにては下を見るによりて此見やうなり」といへる處なり。されど前にいへる如く。今は誰も上下の誤解はなさざる如し。かくて「あるよと見えしが山又山に山めぐり。山又山に山めぐりして。ゆくへも知らずなりにけり」と。さして行き仕手柱にて小廻りし拍子ふみとむるなり。澁くて興あふるゝは先づ此能なるべきか。

白頭などの時。キリまて總べて杖にて舞ひたるシテもあり。「鬼女が有樣みるや〳〵と」と杖兩手に持ちて正面先に出て。「峰にかけり」と高く指し上げて上を見。「谷にひゞきて」と杖打ち附け捨てゝ下を見るは。かの花傳書の意には反したり。されど面白き形たるをば妨げず。此時は杖うちすてゝ直に幕に入り。ワ

キに留めさするなり。

又扇にてする時。「妄執の雲の塵つもつて」と安座をして兩袖かづき。「山姥となれる」と居立ち伸び上りて「鬼女がありさま」と右にまはり。「谷にひゞきて」と乘り込む形もありといふ。是もおもしろし。

雪月花之舞といふ秘事になれば。「よし足引の山姥が」といふクリ前の次第すみて地取にくつろぎ正面向く所に。シテ「よしの立田の花紅葉。」地「更科越路の月雪」といふ文句入りて中の舞あり。カケリには太鼓の頭に合ふ拍子などありて。キリに緩急あり。「塵つもつて山姥となれる」の處は。唐織をかづき伏して兩手上げ居立つなり。トメは橋掛幕際の事もあり。脇留にさす事もあり。もとより雪月花の時は白頭を用ふ。

橋辨慶

前ジテ　武藏坊辨慶

直面　沙門帽子　厚板　大口　水衣　腰帶　小サ刀

扇　イラタカ數珠

トモ　太刀持

素袍上下

後ジテ　前と同人

直面　沙門帽子(又は熊坂の面に長絶頭巾を用ふる流儀もあり)

厚板　牛切　水衣　小

子方　牛若丸

直面　白鉢卷　袴　大口　腰帶　薄衣　太刀

武藏坊辨慶源家の御曹司牛若丸と五條の橋に戰ひて。つひに其

武力に提服し。主従の契約をなして九條の邸へ伴なはれゆく事を作れり。太皷なし、季節は秋。地は京都。

シテトモ出づ

シテ先に立ちトモ跡に従ひ出てゝ舞臺に入り。シテ眞ん中にて名乗る間。トモは後見座に下に居る。

名乗

シテは宿願の子細ありて五條の天神へ。丑の時詣をするよしを述べ。今日満参なれば只今参らばやと存ずるとて。遥拝をなしたる後トモを呼ぶ。トモは太刀を捧げ持ちながら出てゝ手をつくと。前の趣を告ぐ。トモ曰く。「昨日五條の橋を通り候處に。十二三ばかりなる稚きもの。小太刀にて切つて廻り候は。さながら蝶鳥の如くなるよし申し候。まづ〳〵今夜の御物詣は。思召御とまりあれかしと存じ候。」シテ曰く「たとへば天魔鬼神なりとも大勢には叶ふまじ。おつ取り。こめて討たざらん。」トモ「おつとりこむれば不思議にはづれ。敵を手本に寄せつけず。」シテ「手近くよれば。」トモ「目にも。」シテ「見えず」とトモに向ひて詰足し。地になりて。「都廣しと申せども。是程のものあらじ」と正面いてゝ開き。「げに奇特なるものかな」と。驚きたる心にて扇と手と打ち合はせ。トモに語る心にて扇にて指す。「さあらば今夜は思ひ止まらうずるにて有るぞ」とトモに言ひたるが。正面むきて「いや辨慶ほどのものゝ。聞き逃げは無念なり。今夜々更けば橋にゆき。化生のものを平らげんと」と詰足して。勇氣あふるゝ如く。「雲のけしきも引きかへて」と空のけしきをながめやり。夜の更くるを待つ心地にて中入す。

中入

中入の早皷に附きてアヒ出づ。弦師と小鼓あるアヒの時は。狂言袴に水衣着て手に弓の弦入るゝ桶を持ち。牛若の小太刀を拔いて切つて廻るに驚き恐れ逃げ來れるさまなるを「狂言上下なる人なに事ぞ〳〵と追ひ來りて其子細を問ふ。それより前卷にいへる夜討曾我の大藤内と同じく。さま〴〵の滑稽ありて引つ

アヒ

牛若出づ

込む。

一聲にて牛若出づ。モギドウに白き薄衣を引きおほひ太刀を持ちたり。舞臺に入りて。「さても牛若は母の仰せの重ければ。明けなば寺へのぼるべし。今宵ばかりの名殘なれば。五條の橋に立ち出でゝ。河波そへて立待に。月の光を待つべしと」と詞あり。右受けて「夕波のけしきはそれか」の謠すみて地となり。「おもしろのけしきやな」と拍子あり。「夕顔の花の宿。五條の橋の橋板を」と開きて下を見。

後ジテ出づ

「とゝろ〳〵と踏み鳴らし」と拍子ふみて脇座の方へ行き。「音も靜にふくる夜に。通る人をぞ待ち居たる」と。人待つ心にて角掛けて立ち居る。

又一聲になりて後ジテ出づ。長刀を右の手にてかつぎたり。一の松にて正面むき。長刀つきて歌ひ出だす。「すでに此夜も明方の。三塔の鐘も杉間の雲の。光りかゝやく月の夜に。着たる鎧は黑革の。おどしにおどせる大鎧。草摺長に着なしつゝ。もとより好む大長刀」と。前へ出だし見て右にてかたげ。「ゆらり〳〵と」と正面に二足ほど出て。「如何なる天魔鬼神なりとも。面を向くべきやうあらじと。我身ながらも物頼もしうて。手に立つ敵の戀しさよ」と。長刀一つため見て開き右の方へ突く。

靜に舞臺に入る

牛若「川風も早ふけすぐる橋のおもに。通る人もなきぞとて。心すごげに休らへば」と歌ひ。シテ「辨慶かくとも白波の。立ちより渡る橋板を。さも荒らかに踏み鳴らせば」と。橋板を踏む心にて拍子ふみ。

イロエ

「牛若かれを見るよりも。すはや嬉しや人きたるぞと。薄衣なほも引きかづき。傍らに寄りそひたゝずめば」と子方のいふ間に。シテは靜に舞臺に入りて仕手柱に立ち。「辨慶かれを見つけつゝ」と牛若を見てイロエになる。牛若は文句に合はせて薄衣を深く引きかづき居るなり。

シテ長刀をため見て前に構へ。牛若の前に行きて一つ切り附け見たれど動かぬゆゑ。今一つ取り直して突き込み見て跡に下り。長刀突きよく見て。仕手柱に歸り。「言葉を掛けんと思へども。見れば女の姿なり。」と又牛若を見て。「我は出家の事なれば」と正面に直し。「思ひわづらひ過ぎてゆく」と。長刀の石突を後へはづし。二足ほど詰める。

牛若長刀を蹴る

「牛若かれをなぶつて見んと。行きちがひざまに長刀の。柄もとをはつしと蹴上ぐれば」と。シテの後に走りより。石突を左の足にて蹴出して橋掛に行き一の松に立ち居ると。シテは「すは痴者よ物見せんと」といひながら。振り返り牛若を見て脇座の方にゆき。「長刀やがて取り直し」と高く構へて据拍子ふみ。返しに蹈み返しの拍子あり。て。シテ長刀を左右にすくひながら牛若の近くまで進み。切先を薄衣の中まで突き入れて見たれど騒がねば。シテは舞臺にかへり脇座にて長刀をかたげ居る。と牛若は薄衣はねのけ太刀をぬきて舞臺に入り。「つゝさゝへたる長刀の。切先に太刀打ち合はせ。つめつ開いつ戰ひしが」と。互に切先を一上一下と合はせ。飛びちがひて又上と下とにて合はせ。「何とかしたりけん。手元に牛若よるとぞ見えしが。疊み重ねて打つ太刀に。さしもの辨慶合はせ兼ねて」と。牛若に長刀の刃を續けさまに打たれながら橋掛まで跡しさりし。「橋掛を二三間しさつて肝をぞ消したりける」と。飛び開き二つして膝一つ打ち。始めて少年の腕前に我を折りたる心あり。

二人相戰ふ

されども猶屈する能はずして。「あら物々しあれほどの。小性一人を切ればとて。手なみに如何て漏らすべきと」と今一度の勝負を望み。「長刀柄長くおつとりのべて。走りかゝつて丁と切れば」と舞臺に入り。長刀かまへて一つ切り合ひ。「そむけて右に飛びちがふ。取り直して裾を蹴ぎ抑へば」と。飛び開き。シテ膝立て直し牛若を見。長

長刀打ち落さる

刀取り直して牛若の裾を前の方へ横に拂ふと。牛若は一足飛びに飛び。シテは仕手柱に來て。「躍り上つて足もためず」と牛若もろともに拍子蹈み。「宙を拋へば」と高く切りつくれば。「頭を地に附け」と牛若は身を沈ませ。「千々に戰ふ大長刀。打ち落されて力なく」と又切り附くる長刀の先を牛若に持たれ。正面より脇正面の方へ廻りて

打ち捨て。「組まんと寄れば切り拂ふ。すがらんとするも便なし」と。大手を廣げて脇座に立ち居る牛若に組みつかんとす。切り拂はれて飛びのき。今一度右の手を出だして追ひかけ見たれど近よる能はざれば。大小前に來り小廻りして。「希代なる少人かなとて。あきれ果てゝぞ立つたりける」と。兩手打合はせて敬服したる心を見せ。打

切ありてロンギとなり。「不思議や御身誰なれば。まだ稚き姿にて。かほどけなげにましますぞ。委しく名のりおはしませ」と。地に歌はせて牛若に問ふ。「今は何をか包むべき。我は源牛若」と。子方みづから歌ひて答ふ。「義朝の御子か。」「さて汝は。」「西塔の武藏辨慶なり。」互に名のりあひてシテは下に居合釋し。「降參申さん御免あれ。少人の御事。我は出家。位も氏もけなげさも。よき主なれば賴むなり。粗忽にや思召すらん去りながら。是又三世の奇緣の始め。今より後は主從ぞと」と固く歸服の誠をあらはし。薄衣をかづかせなどして主君と仰ぎ。みづからも打ち落されたる長刀をかたげて。少し跡にしさると牛若は。橋掛に行き。シテは柏子ふみて留むる。牛若は降參申さんといふ文句を聞きて。ぬきたる太刀をば鞘に收めて持つなり。

觀世流にては。橋辨慶の替之形に笛之卷といふがありて。中入前は總べて常の橋辨慶とかはれり左にいふべし。

まづ子方を先にして男ワキ出て。「かやうに候ものは。義朝の御内に有りし羽根田の十郎秋長にて候。さても義朝の御子常盤の御腹には三男。牛若殿と申して御座候を。學問の爲に鞍馬の寺へ御登せ御座候所に。學問をばし給はで。夜な〳〵五條の橋に出て。あまたの人を御切り候。上下のわづらひかた〳〵以て然るべからず候程に。常盤の御方に參り。此事を御敎訓させ申さばやと存じ候」と名乘すみて。子方を舞臺に殘し。一人橋掛にゆき幕に向ひて。「いかに申し候。秋長が參りて候」といふと。色なし唐織着流しのシテ女出て。「何秋長と申すか此方へ來り候へ」といひて床几にかゝり。「さて只今は何のために來りたるぞ」と問ふ。此シテ女は即ち牛若の母常盤なり。ワキ答へて。「唯今まゐる事餘の儀にあらず。鞍馬の寺に御座候牛若殿。夜な〳〵

五條の橋に御出あつて。あまたの人を御切り候。上下のわづらひかたく以て然るべからず候へば。此方へ御出あつて。御教訓あれかしと存じ候」と述ぶ。シテ「さて牛若殿はいづくに渡り候ぞ」と問ふ。ワキ「あれに御座候」と答ふ。シテ「こなたへと申し候へ。」ワキ「畏つて候」と立ちて。舞臺なる牛若に向ひ。「こなたへ御參り候へ」といひて連れ來り。シテの前にすわらすと。「いかに牛若丸。此程は寺に有るかとこそ思ひしに。何とてこなたへは下りたるぞ」とシテ牛若にいふ。牛若兩手を突き。「さん候久しく母上を見參らせず候程に參りて候」と答ふるを。「いや〳〵お事の心あるを見るに。思ふといふも空言よ。此程平家の公達の肩を並べしを爭ひ。同じ寺中にありとても。學問にだにすぐれなば。他山の聞え寺家の覺え。かたく母も嬉しう思ふべきに。學問をこそせざらめ。夜な〳〵五條の橋に出て。人を失ふよしを聞くぞとよ。誠左樣にあるならば。母と思ふな子とも又」と。強く言ひ諭して正面にずかりと向き。地になりて。「思ふまじ實によしなやな。かほどに母は思へども。其かひ更になき上は」と再び牛若に向き。「叱りてもよしぞなき。うたての者の心や」と打ちしをり。「よしやよし親子をも」と打切ありて。入り替り三人とも舞臺にゆき。シテは地の上に。牛若は脇正面にシテの方向き。ワキは其次に下に居て。「よしやよし親子をも。思ひ思はぬ中ならば。中々に安からぬ。御身のためは然るべし。いかなれば奇類又は空飛び翔る鳥も。その理りを知ればこそ。鳩に三枝の禮を爲し。烏きう〳〵の。孝行なるはいかばかり。などや御身は不孝なると。」と膝一つ打ちて其手にて牛若を指し。「叱れば牛若も。手を合はせ立ちよりて。ゆるして給べと泣きゐたり」と。牛若は合掌して罪を謝し打ちしをると。シ

テは面伏せて悲しき思入あり。

それよりクセにて。「お事まだ稚かりし時よりも。父に離れてむざんやな。敵の手にも渡りなば。いかなる淵川の。瀬にも沈みもせましと。心にかけて思寢の。夢の一時。花の夕べの山おろし。聲高く泣く時は。六波羅の人やもし。聞くらんものを悲しやと。忍びて落ちしも。今思出の涙かな」と。又二人諸共にしをりしが。氣を替へてロンギとなり。牛若「母の仰せの重ければ。明けなば寺へ登るべし。さりながら此笛に。えたる便のあるぞとは。いかなる謂候ぞ。」と。懷中せし笛を出だし歌へば。

シテ「げに理りの不審かな。是は弘法大師とて。貴き人の御笛を。傳へたる故なれば。かやうに我もいふぞとよ」と答へ。牛若「そもや大師の御事は。久しき事と聞くものを。傳へ給ふはいかならん」と問ひ。シテ「是はもと入唐の商人もてる笛なるに。その

蟲喰のあるぞとよ」と答へ。牛若「さてはしるしの何ぞとも。あらはし給ふ文字あらん。委しく語りおはしませ」と笛もてくるを。シテ受取り見て。「これ御覽ぜよ今までは。人にも隱し御身にも。」牛若「見せさせ給ふ事もなきに。」地「今こそ委しくは。見も明石潟鳥がくれ。並ぶや蟬のもとに。卷き隱したる錦を。解きてよく見れば。不思議やな虫喰の。一萬五千。三百餘歳經て弘法大師の。御手に渡り其後に。義朝の末の子。牛若が手に渡るべしと。たしかなる虫喰。かたじけなやと戴き」と。此謠の内に。笛を裏返し見。又結ひつけたる錦を解きて見などする形ありて。牛若に渡し。「あけなば寺に登るべし。かまひてお事いつはるな。又よと母はいひすてゝ。常のすみかに入りにけり」と。シテ立ちて入ると。牛若は立ちて「いかに羽根田と呼び。「母の仰せの重ければ。明けなば寺へ登るべし。今宵ばかりの

名殘なれば。五條の橋に出て。立待に月をながめうずるにてあるぞ」といひ。ワキ「畏つて候」といひて。幕に入る。たゞ珍しきのみにて別に面白き點もなく。殊に「母の仰せの重ければ。明けなば寺へのぼるべし。」云々の文句は。中入前と中入後とに二度あるのみか。ロンギにも「明けなば寺へ」の句はあれば。都合三度かさなりたるもうるさく。その他すべて文章としても取られぬ作にて。まづきものなれば。あまり人に用ひられぬより遠く仕舞ひ込まれたる曲なるより傳授事となれりしならん。後ジテは普通のと少しもかはる處なし。金剛流にては扇之形とて。イロエの間にシテ脇座の方に長刀かまへ立ち居ると。牛若は一の松より薄衣かづきたるまゝにて。扇をひらき投げつくるを。シテ長刀にてあしらひ打ち落すといふ持之形をする時もあり。おのれは能樂堂にて一度みたりしが。

扇之形

其時のシテは大伴孫三郎。牛若は今の金剛太夫鈴之助なりき。

春榮

シテ　増尾太郎種直
直面　段袋斗目　大口　掛素袍　腰帶　小サ刀　扇　守り
笠
トモ　増尾從者小太郎
素袍上下　小サ刀　常扇　太刀持つ
子方　増尾春榮丸
箙　長袴　扇　文箱中
ワキ　高橋權頭
梨子打烏帽子　白鉢卷　直垂上下　小サ刀　扇

能のしなり　三の卷

ワキヅレ　早打
　　素袍上下　右刀　ぬぐ　免狀持つ
アヒ　高橋從者
　　狂言上下　太刀持つ

増尾氏に兄弟あり。兄を太郎種直といひ。弟を春榮丸といひて。共に宇治橋の合戰に趣きけるが。弟は敵の生捕となりて伊豆の三島へ送られ。兄は無事なりしかば。兄の身を以て弟の命に代らんと思ひ立ち。三島に尋ね至りて春榮の預りなる高橋權頭に面會し。まづ春榮に對面したき由乞ひたるに。他の人とちがひ春榮は殊に痛はり申す人なればとて容易くゆるされ。對面せんとしたりしに。春榮は兄にあらず下人なりとて固く拒みしを以て。兄は情せまり心弱して切腹せんとせしかば。春榮つひに見かねて。兄の命を助けんが爲め下人と僞りし事を自白し。兄に向ひて今まで下人といひし無禮を謝せしかば。兄聞く人々皆感涙に咽ばぬはなかりき。かくて鎌倉より早打立ちて急ぎ誅せよとの事なれば。春榮死に就かんとす。兄また身代りになりて死せんとす。遂に二人共に首の座に直りゐたりしに。再び鎌倉より早打來りて。若宮別當の請願により。春榮の死を宥めらるゝよしをいふ。こゝに於て兄弟の喜び。高橋の喜び。共にたとへんにものなく。高橋は春榮を請ひ受けておのが養子とし。家に傳はる重代の太刀を與へしかば。兄種直は嬉しさの餘り酌に立ちて。祝言を述べ歌ひ舞ふ事を作れる目出度き能なり。太鼓なし。季節知らず。地は伊豆。

子方着座す

子方まづ出てゝ脇座の處に座つく。高橋氏に捕虜となり居る體なり。次にワキは太刀持なる狂言を從へ來りて舞臺に入り名のる。狂言は直に狂言柱の下に下に居る。

シテトモ出ヅ

次第にてシテは笠をかぶり出でゝ一の松に立ち。跡より來れるトモと向き合ひて。「散らぬ先にと尋ねゆく。〳〵。花をや風のさそふらん」と歌ひ。笠ぬぎ正面向きて。「是は武藏の國の住人。增尾の太郎種直にて候。さても宇治橋の合戰に弓手の肩を射させ。その矢を拔かんと少し引き退き候間に。弟にて候春榮深入し。やみ〳〵と生捕られて候。承り候へば。生捕いづれも近き程に誅せらるゝ由申し候間。某も囚人の數に入らばやと存じ。只今春榮がありかへと急ぎ候」と述べ。又笠を着むきあひて道行を歌ふ。住みなれし都を出てゝ日を重ね行く程に。伊豆の國府なる三島の里に着きたるよしの文句なり。笠をぬぎ正面に直し着ゼリフありて。囚人の奉行高橋とやらんに對面したきよしを申せといへば。畏りたるよしを述べてトモはシテと入り違ひ舞臺際にゆき。案内申すといひて狂言を呼び出だし。春榮殿のゆかりの者なるにより高橋に對面申し度き由をいへば。暫く御待ち候へといひてワキの前にゆき。その由を告ぐ。ワキ囚人に對面は禁制なれども。春榮殿の事は別して痛はり申すにより。そのゆかりの人ならば對面申すべし。さりながら大法なれば太刀刀をばあづかれと下知す。かくて二人とも太刀刀を預けて舞臺に入り。トモは後見座にくつろぎ。シテは仕手柱先にゆくと。ワキ「春榮殿のゆかりと仰せ候は何くに渡り候ぞ」と問ふ。シテ「さん候これに候」と答ふ。ワキ「是は春榮殿の爲には何にて渡り候ぞ。」シテ「是は春榮が兄に。增尾の太郎種直と申す者にて候が。今度宇治橋の合戰に弓手の肩を射させ。其矢を拔かんと少し傍に引き退き候間に。弟にて候春榮深入し生捕られて候間。餘りに見捨て難く候へば。某も一所に誅せられん爲に。遙々これまで參りて候。春榮に引き合はせられて給はり候へ。」此に於てワキ快く承諾し。入りて春榮に其由を告げ出てゝ對面せよといふ。春榮「是は誠しからず候。兄にて候ものは宇治橋

ワキニ對面ス

春榮見て兄ならずといふ

の合戰にて重手負ひ。存命不定とこそ承り候ひつれ」とて。面舁を拒むが如し。ワキ「あら不思議や。まさしく御舍兄と仰せ候ものを。去りながら物の際よりそと御覽候へ」といひて。少し前に連れゆき。扇を開き窓の心にて其骨の間よりのぞかすれば。春榮ちよと見て。「不思議の事にて候。譜代召し使ひ候家人にて候間。急ぎ追つ歸して給はり候へ」といふ。

ワキ其よしをシテに語り。何とて聊爾なる事をば承るぞと詰る。シテ「しばらく」と押し留め。「まづ御心を靜めて聞し召され候へ。家人の身として兄と名のり。一所に誅せらるゝ事の候べきか。如何樣にも御沙汰候ひて。引き合はせられて給はり候へ。某對面して。家人か兄かの勝劣を見せ申し候べし」と辨ず。ワキいかにも尤なりと同意して。再び春榮に。「只今の者をば荒々と申し追つ歸して候さりながら。彼者の心中あまりに不便に候間。後姿をそと御覽候へ此方へ

シテ春榮を呼びとむる

渡り候へ」といひて連れ出し。シテの方へ突きやると。顏見合はせてシテは呼び掛け。「いかに春榮。何とて某をば家人とは申すぞ。さても此度宇治橋の合戰に弓手の肩を射させ。其矢を拔かんと少し傍に引き退き候際に。御身は深入し生捕られたり。其際の先途をも見屆けざれば。家人といふ事弟ながらも恥かしうこそ候へ去りながら。一所に誅せられん爲に。是まで遙々來りたるに。何とて左樣には申すぞ」といへど。春榮なほ知らず顏にて。「いかに汝は三世のよしみを思ひ。是まで遙々來りたる志。かへすがへすもやさしけれ去りながら。汝は故郷に歸り。母御に申すべきやうは。春榮こそ誅せられ候へ。逆樣なる御吊ひにこそ預り候ふべけれとよくよく申し候へ」と言ひ放つにぞ。シテは激して「何と家人と朽たすとも。遂には隱れよもあらじ」といひ。春榮つれなく「早とく歸れと叱りけり」といひ。シテ「これを物にたとふれば。般のやうかは父を討ち。」春榮「桑

腹を切らんとす

春榮兄を呼びとむる

のかくいは師匠を討つ。」シテ「今の増尾の春榮は。」春榮「現在の兄を」弟といふ。」シテ「是は逆罪たるべきに。」春榮「誠は深き孝行なり。」シテ遂に爲す所を知らず。心せまりて「いやとにかくに命を捨つるまで。種直これにて腹切らん」と正面先に出て。腰の刀をぬかんとせしに。先に大法なりとて取り上げられたるを失念せしかば。「や。刀は參らせつ。御芳志に刀を給はり候へ」と。後見座の方へ取りにゆかんとするを。「なふ〳〵暫くこは如何に」と呼びかけて春榮シテの袖を引き留め。地になりて。「命を助け申さんとてこそ。家人とは申しつれ。忠が不忠になりけるか。免させ給へ兄御前」と。二人向き合ひ。春榮は手を合はせて謝罪し。シテは面伏せて情の切なるを示す。する人もこゝに至れば覺えずほろりと落す事おほし。

「種直も春榮も」の打切にて。春榮は本の座に歸り。ワキは地の前に。シテは眞ン中にゆきて着座す。「種直も春榮も。囚人守護の兵も。

鎌倉より早打の來れるよしを云ふ

互の心を思ひやり。げに持つべきは兄弟なりとて。共に袂をぬらしけり。〈〉と。二人向き合ひてしをり。ワキも同じくしをる。

ワキは兄弟の心中を感じて落涙したるよしを述べ。春榮の面ざし。宇治橋の戰にて討たれたる我子と少しも違はねば。萬一死罪を免かれたらば。申し受けて養子にしたきよし語り居たる折しも。急使の來りし心にて。「や」と驚きて立ち橋掛の方に向ひ。「何と申すぞ。是は誠にてあるか。」といひて正面直し。「あら何ともなや。只今申しつる事も徒事にて候。又鎌倉より早打立つて。箱根を越さぬ先に。囚人を皆誅し申せと仰せ出だされて候」といひて。春榮には御最期の御用意をとすゝめ。種直には急ぎ故郷に歸るべきを促す。此時早打の來れるは文句とワキの擧動のみにて其事を知らせ。別に役者は出て來らず。是は次の早打と重複せるを避くる意味もあるべし。

かくと聞きてシテは春榮を助け某を誅し給へと請ひ。ワキは早目錄

形見を母におくる

にて御目に懸けたれば叶はずと謝絶し。重ねて仰せはさる事ながら平に私を以てといへども容れられねば。さらば某をも一所に誅せられよと請ひて。それは兎も角もとの承諾を得。故郷へ形見を贈れと春榮にすゝめ。トモなる小太郎を呼び出だして母御への傳言を托し。懷中より守りを出だして左に持ち。「是なる守りは種直が。母御の方より給はりたる。守り佛の觀世音」と押し戴き。「種直が形見に御覽候へ」と渡せば。春榮も懷中より文を出だして。「是なる文は春榮が。最期の文にて候なり。又形見には烏羽玉の。我黑髮のすそを切り。さばかり明暮一筋を。千筋と撫でさせ給ひし髮を。春榮が形見に參らする」と渡すを。トモは一々受取り。扇ひらきて之に戴せ。跡に下り手を突き居る。

シテはトモに向ひ。「あら定めなやさるにても。我こそ殘りて御跡を。吊ふべきにさはなくて。成人の子をば先立てゝ」と歌へば。地は受

取りて。「嘆き給はん母上の。御心の内。おもひやられて痛はしや」と歌ふ。此終の文句にてシテも春榮も打ちしをり。親子の別を悲しむ心切なり。

クリになりてトモは後見座にくつろぎ。文も守りも懐中し。小さ刀さして扇持ち。橋掛より幕に入る。

クセ

クリありサシありクセありて。シテ「處を思ふも頼もしや」のアゲを歌ひ。地になりて。「こゝは東路の故郷を去つて伊豆の國府。南無や三島の明神。本地大通智勝佛。過去座點の如くにて。黄泉中有の旅の空。長闇冥の巷までも」といふ文句の内に。ワキは春榮を立たせて正面に向け首座に下に居らせ。又シテに向ひて首座を教へ。シテも同じく春榮の右の方に正面むきて安座し。「われらを照らし給へと。深くぞ祈誓申しける」の文句にて。二人一所に合掌すると。ワキは直垂の右の肩脱ぎ太刀を持ちて後に立ち。「雪の古枝の枯れてだに。二

首座に直る

度花や咲きぬらん」と。謡すゝみて終ると同時に。刀の柄に手を掛けんとす。此時遅し彼時早し。早打は「いかに高橋殿」と呼び掛けつゝ免狀を捧げて出で來る。「鎌倉よりの早打なり。暫く御待ち候へとよ」といへども。ワキは少しも由斷せず。「すは又早打來れるは。遅し切れとの御使か」とて。再び刀の柄に手を掛けんとす。早打「いや若宮別當の申しにより。囚人七人の免狀なり。」ワキ「さて春榮殿は。」早打「七人の内」と聞きて。太刀を捨て。「あゝうれしゝ〳〵まづ讀まん」といひて免狀を受取り。正面むき開き見て。「何若宮別當の申しにより。囚人七人免狀の事。第一番には別當の御弟豐前の前司。第二番には豐後の次郎。第三番には增尾の春榮丸。殘りはまづ〳〵讀みても無益」と免狀を捨て。「はや助くるぞ春榮と」と。春榮を首座より立たせて本の座に歸らせ。ワキも本の處に座し。「太刀の下より引き立てゝ。命助かる兄弟は。嬉しさも中々に。思はぬ程の心かな」

第二の早打來る

免狀を流す

兄弟助けらる

と。シテ膝立て直して春榮と向き合ひ。それより「今の心は獣の。雲に吠えけん心地して。千々の心有難き。兄弟のよしみこそ。誠にあはれなりけれ」と。シテ春榮に開き。真ン中にゆきて下に居る。

春榮を養子に所望す

ワキ「いかに誰かある」と狂言を呼び。「種直に刀を參らせ候へ」と言ひつくる。と狂言小サ刀を持て來りてシテの左に置く。シテ受取りてさす。此に於てワキは前にいひかけたる春榮所望の事をいへば。シテ快く承諾して此上は參らせんと答へ。今日は殊更最上吉日なればとて。家に傳はる重代の太刀を春榮に讓り。「猶喜びの盃の。影もめぐるや朝日影」とワキ立ちて春榮とシテとに扇にて酌をなし。立ちて「伊豆の三島の神風も。吹きをさむべき世の初」と正面へ開き。「嘉辰令月とは」と拍子四つ踏みて。「此時をいふぞめでたき」と左右して留め座にかへる。

「なほ〳〵廻る盃の。度かさなれば春榮も」と。春榮立ちてワキとシテとに酌をなし座にかへると。シテは「千代に八千代をさゞれ石の」と歌ひ。遂に立ちて舞ふ。男舞なれば勇ましとも勇まし。舞の掛りは「祝ふ心は萬歳樂」にて。アガリのワカは「東路の秩父の山の松の葉の」なり。

男舞

キリ

シテ「老木も若緑」と歌ひ。地「立つや若竹の。」シテ「親子の睦み。」と角取りて廻り。地「または兄弟。かれといひ此といひ。何れも〳〵睦ましく」と指し分けし右へ廻る時。ワキは子方を連れて立ち。仕手柱先にて春榮を前にしてワキ下に居り。シテは右受け扇上げて正面へ出て。扇前に置きて下に居り。「親子兄弟と榮ふる事も。是れ孝行を守り給ふ。三島の宮の御利生と伏し拜み」と。兄も弟も合掌し。「親子兄弟さも睦ましく打ちつれて」と扇にて指すと。春榮とワキとは幕に入り。シテは仕手柱までゆきて乘り込み開き拍子ふむ事常の如し。

道成寺

前ジテ　白拍子
深井　葛　葛帶　鱗箔　腰卷　唐織鹽折　扇
物著にて前折烏帽子
後ジテ　蛇體
般若　唐織ぬぎ　打杖
ワキ　住僧
角帽子　熨斗目　大口　紫水衣　扇　數珠
ワキヅレ二人又は四人　伴僧
角帽子　熨斗目　大口　水衣　扇　數珠
アヒ　二人　能力
能力頭巾　狂言袴　脚半　水衣　扇

紀州道成寺に鐘の供養あり。女人禁制と觸れ出だされたるに。此國の傍に住む白拍子とて尋ね來り。供養を拜ませ給へといふ。ならぬといへば。舞を舞ひて見せんといひて遂に舞ひつゝ鐘に近より。鐘樓より引き落して其下に入りたるが。僧に祈られて蛇躰をあらはし。日高川に飛び入りて失せたる物語を作れり。舞に亂拍子などいふがありて秘事中の秘事とする曲なり。太鼓

鐘の作物出づ

あり。季節は春三月。地は前にいへり。

囃子方座に着き地謠出て並ぶと。狂言の後見鐘の作物を持ち出てゝ。舞臺の眞ン中の棟木に釣り上げ。綱をば笛柱の鐶に通して結び置き。猶シテの後見三四人にて引かへ居るなり。

觀世寶生にては右の如くなれども。金春金剛喜多にては。ワキ出て名乘すみて。「如何に能力今日は最上吉日にてある間。鐘の供養をのべうずるにてあるぞ。鐘を鐘樓に上げ候へ」といふと。

狂言「畏つて候」とて樂屋に入り。「えいとう〳〵」「えいや〳〵」と掛聲しながら持ち出づるなり。

ワキ名乘る

名乘笛ありてワキ出て。舞臺に入りて。「是は紀州道成寺の住僧にて候。さても當寺に於て去る子細あつて。久しく撞鐘退轉仕りて候を。此程再興し鐘を鑄させて候。今日吉日にて候程に。鐘の供養を致さばやと存じ候」と述べ逆拜す。此間ワキヅレは橋掛に下に居る。

能力鐘をあげたるよしを告ぐ

それよりワキは脇座に。ツレは其下に着座し。「いかに能力」と呼び出だすと。狂言出て丶兩手を突く。ワキ「はや鐘をば鐘樓へ上げてあるか」狂言「さん候はや鐘樓へ上げて候御覽候へ。」ワキ「今日は鐘の供養を致さうずるにてあるぞ。又さる子細ある間女人禁制にてあるぞ。かまひて一人も入れ候な。其分心得候へ。」狂言「畏つて候」といひて立ち。正面へ出て丶。「皆々承り候へ。紀州道成寺において鐘の供養の候間。志の方々は皆々參られ候へ。又何と思召し候やらん。供養の庭へ女人禁制と仰せ出だされて候間。其分心得候へ〳〵」と觸れて笛吹の前に座着く。アドの方は狂言柱に前より座つきて居り。

シテ出づ

次第にてシテ出づ。シテの出づる時。小皷秘曲の手を打つ事などあれど。其家の習とする傳授めきたる事は暫くいはじ。さて舞臺に入り。大小の方むきて例の如く立ち。「作りし罪も消えぬべし。〳〵。鐘の供養に參らん」と歌ひ。地取の間に正面直して。「是は此國の傍に住む白拍子にて候。」といひ少し右受けて。「さても道成寺と申す御寺に。鐘の供養の御入り候由申し候程に。」又正面直して「只今參らばやと思ひ候」と述べて。打切あり道行となる。「月は程なく入しほの。〳〵。煙滿ちくる小松原」と右の方受け。「急ぐ心かまだ暮れぬ」と二三足出て丶。日高の寺に着きにけり」と大小前の方に二三足ゆきて足を留め。正面直して。「急ぎ候程に。日高の寺に着きて候。やが

道行

狂言にとがめらる

て供養を拜まうずるにて候」といひて。正面へ少し出かくると。狂言聲かけて。「なふ〳〵女人禁制にて候程に。供養の庭へは叶ふまじ」と叱り留むる。

シテ「是は此國の傍に住む白拍子にて候。鐘の供養にそと舞を舞ひ候べし。供養を拜ませて給はり候へ」といふにぞ。狂言「誠に是は又只の女人とは違ひ申し候間。某が心得を以て拜ませ申さうずる間。面白う舞を舞うて御見せ候へ」といひ。シテ「あら嬉しや。淫分舞をまひ候べし」といひて後見座にくつろぎて。狂言は座にかへる。

シテは烏帽子を着て一の松に行き。柱ごしに鐘を見上げ。それより心の進みたる體にてすち〳〵と舞臺に入り。仕手柱さきにて。「うれしやさらば舞はんとて。あれにまします宮人の。烏帽子を暫し假に着て」と右受け歌ひて。「既に拍子をすゝめけり」と正面直し。「花の外には松ばかり。〳〵。暮れそめて鐘や響くらん」と又正面直して歌

能のしなり　三の卷

亂拍子

ひ。是より小鼓一調のみの亂拍子となる。亂拍子は白拍子の舞ひたる曲の一つにて。拍子踏みながら一段々々と鐘樓の石段を昇りゆく心あり。

公之舞

中の段といふ過ぎて。扇を左に逆に持ち「道成興行の寺なればとて。道成寺とは名づけたりや」とシテ歌ひながら猶踊み。名づけたりやより位すゝみて。「山里のや」と拍子ふみて急之舞となり。二段目に脇座の前より鐘を見上ぐる時。笛ヒシギありて。扇左の手にかざしつゝ鐘の下を沈みて通る處など。身の毛もよだつ程の心地なり。此舞の拍子をすべて蹈まざるは眠を覺ませじとの心ぞといふ。

ワカの後

「春の夕暮きてみれば」・のワカありて上扇つねの如く。「入合の鐘に花ぞ散りける。花ぞ散りける。花ぞちりける」と大左右打込して開き。「さるほどに〳〵。寺々の鐘」とシテ歌ひ。「月おち烏ないて霜雪天に」と上を高く見。「滿汐ほどなく日高の寺の。江村の漁火。愁に對して人々眠れば」と。而使ひてワキワキヅレを見まはし。よき隙ぞと。立ち舞ふやうにてねらひよりて。つかんとせしが」と。鐘を見上げて扇を鐘木の心に振り上げ。直に烏帽子の紐解き捨て扇にて刎ねおとして鐘の下にゆき。兩手さし上げて鐘の緣を引きおろすやうにして。正面むきて立ち。「おもへば此鐘うらめしやとて」と。六つ拍子をふみ。又踏返しゝて。「龍頭に手をかけ飛ぶとぞ見えし。引きかづきてぞ失せにける」と。シテ飛びあがる。鐘おつる。此呼吸たゞ髮毛一筋の間をも置かざるほどの難所とすることなるが。シテは申すまでもなけれど。思へば綱を引きゐて丁度よき處に落す人こそ骨折なれ。今よりは廿年ぢかくの事なりしが。金春流の櫻間伴馬が之を天覽に供ふる事ありしに。鐘の綱引は心に叶ふ人この東京にはなしとて。遙々鄕里の熊本より舍弟金記を呼び上したる例もあり

鐘を見上ぐ

鐘落つ

鐘引の役

き。何にせよシテに次ぎての大役なるべし。

鐘落つると。狂言二人その物音にびッくりして。舞に見とれてとろ〳〵としたりし眠も覺めあちらこちらところげまはり。やうやう立ちて。シテアヒは地震かと思ひ。「あゝ〳〵なふ〳〵桑原々々。」アドは雷鳴かと心得。「今のは何事であつたぞ。したゝかな鳴りやうて有つた。肝がつぶれて生根が附かぬ」などいひて互に顔見合はせ。「さて〳〵わごりよのなりは。」「いやお主は何として來たぞ。」「さてもく肝をつぶいて氣を取り失うとしたが。わごりよが何としたぞと思うて尋ねて來たは。」「さてはわごりよも左樣て有つたか。身共は今に氣が附かぬ。舞がおもしろうてとろ〳〵と居眠りした折節。おびたゝしく鳴つた處て肝をつぶいた。」「尤ぢや。さて今の鳴りやうは何であらうと思ふぞ。」「其事ぢや。神鳴てあらうか。神鳴ならば前かどに少しなりとも音がせう事ぢやが。不審な。」「わごりよがいふ如くぢや。地がおびたゝしうゆるいだ程に。身共は地震であらうと思ふ。」「いや〳〵それてもあるまい。まづこちらへ渡らしめ。」落ちてある鐘を見附けて。「南無三寶。鐘が落ちてあつたは。」「誠に是であつた。」「隨分念を入れて釣つたが。龍頭が切れた。何として落ちたぞな。」「見れば龍頭も其まゝ有り。損ねた處もないが不審なことぢや。」といひて鐘にさはつて見て。兩手を耳に當て。「あつやの〳〵したゝかにゝえたは。」「落ちた分てにより事はあるまいが」と同じくさはつ見て。「誠に事の外にえた。」「さて是は何としてよからうぞ。此分てはおかれぬ程に此由を申さしめ。」「尤ぢや。餘の者の口から御耳へ立つたらば惡しからう。此分てはおかれまい。わごりよ云うてくれさしめ。」「言ふは安いが身共が申したらばわるからう。わごりよが受取つた程にわごりよがいて言はしめ。」「さればこそ身共が受取つたによつて

言ひにくい程に。わごりよがいて言うてくれい」とて突き出す。「いや〳〵身共は言ふ事はなるまい。早ういて言はしめ」と突き出す。「さりとては頼む程にわごりよ言うてくれい」と突き出す。「これはいかな事。身共が言はう子細がない。わごりよ行かしめ。身共は知らぬぞ」と突き出し引つ込む。突き出されてワキの前に両手を突き「落ちて御座る」といふ。ワキ「何が落ちたると申すぞ。」狂言「鐘が鐘楼より落ちて候。」ワキ「鐘が鐘楼より落ちたると申すか。」狂言「なか〳〵。」ワキ「何として落ちたるぞ。」狂言「隨分念を入れて御座るが落ちて候。」ワキ「別に思ひ合はする事はなきか。」狂言「それにつき思ひ出だしたる事が御座る。最前此國の傍に住む白拍子にてあるが。鐘の供養を拜ませてくれよと申した程に。禁制のよし申して御座れば。鐘の供養に舞を舞うて見せ申さうずると申したによつて。拜ませて御座るが。もし左樣の者のわざにても御座あらうずるか。」ワキ「言語道斷。かやうの儀を存じてこそ。女人禁制のよし申して候に。曲事にてあるぞ。」狂言「あゝ。」ワキ「さりながら立ち越え見うずるにて候。」狂言「急いでごらうぜられい」といひて立ち。「なふ助かりや〳〵」といひながら樂屋に入る。

狂言入りて後。ワキ立ちて。ワキヅレを伴なひ鐘の落ちたる處に至り。「此鐘に付いて女人禁制と申しつる謂の候を御存じ候か」といへば。一のワキヅレ「いや何とも存ぜず候」といふ。ワキ「さらば其謂を語つて聞かせ申し候べし。」ツレ「ぬんごろに御物語り候へ。」と。是よりカダリの文句となる。「むかし此所に。まなごの庄司といふ者あり。彼者一人の息女を持つ。又其頃奥より。熊野へ年詣する山伏のありしが。庄司が許を宿坊と定め。いつも彼所に來りぬ。庄司娘を寵愛のあまりに。あの容僧こそ。汝が妻よ夫よなんどゝ戯れしを。

稚心に誠と思ひ年月を送る。又ある時かの客僧庄司が許に來りしに。彼女夜更け人靜まつて後。客僧の閨にゆき。いつまで童をばかくて置き給ふぞ。急ぎ迎へ給へと申しゝかば。客僧大きに騷ぎ。左あらぬ由にもてなし。夜にまぎれ忍び出て此寺に來り。平に賴むよし申しゝかば。隱すべき所なければ。撞鐘をおろし其内に此客僧を隱し置く。さて彼の女は山伏を。遁すまじとて追つかくる。折節日高川の水以ての外に增りしかば。川の上下をかなたこなたへ走り廻りしが。一念の毒蛇となつて。河を安々とおよぎこし此寺に來り。こゝかしこを尋ねしが。鍾のおりたるを怪しめ。龍頭をくはへ七纏ひ纏ひ。焰を出だし尾を以て敲けば。鐘は即ち湯となつて。終に山伏を取り終んぬ。なんぼふ恐ろしき物語にて候ぞ。」と語る間にも所作あり。て。遂に鐘を祈り上ぐる一段となり。ワキとワキヅレと左右に分れて鐘に向ひ。ワキ「水かへつて日高河原の。眞砂の數は盡くるとも。

ワキ祈る

撞鐘頭

鐘動く

鐘鳴る

鐘上るシテ出づ

行者の法力つくべきかと。」ツレ「皆一同に聲を上げ。」ワキ「東方に降三世明王。」ツレ「南方に軍荼利夜叉明王。」ワキ「西方に大威德明王。」ツレ「北方に金剛夜叉明王。」ワキ「中央に大日大聖不動。」地「動くか動かぬか索の。なまくさまんだばさらだ。せんだまかろしやな。そはたやうんたらたかんまん。聽我說者得大智惠。知我身者即身成佛と。今の蛇身を祈る上は。」

祈る。この「つきがね」といふ「つ」の字に當るやうに太皷が天と打ち出だす撥あり。撞鐘頭とて太皷もワキも秘事とするなり。

「すは〳〵動くぞ祈れたゞ」とシテ鐘を動かし。「祈り祈られ撞かねど此鐘ひゞきいて」と打上ありて。シテ又鐘の中にて鈸鏡を鳴らす。それより「引かねど此鐘躍るとぞ見えし」と。後見鐘を少し引き上ぐると。シテ緣を持ちて動かし。「程なく鐘櫻に引きあげたり」と鐘高く上り。シテは兩手をさしあげて緣を持ちゐたりしが。鐘離るゝ

とべたりと兩手つき安座する。「あれ見よ蛇體はあらはれたり」と地は靜めて歌ふ。面白き處ぞかし。シテは鐘の中にて唐織ぬぎ面取り替へ扇を捨てゝ打杖を持ちなどしつ。皆その中に準備してあるなり。シテは脱ぎたる唐織を腰に卷き附けて立ち。太皷の頭いくつも重ね打たせて後。打杖を大きく右の方へ出だすと。それを合圖に太皷直りてイノリとなる。まづ脇正面の方へ少し行きてワキを振り返り見。打杖ふりあげて脇座の方へ追ひゆき。面を切りてきめつける處にて段となり。それより橋掛の方へ行きがけに。仕手柱を過ぐる時。腰にまとへる唐織を脱ぎ捨つるを後見おさへて引き取り片づくる。これを道成寺にては鱗落しといひ。裝上にては衣落しといへり。幕際までシテの行くをワキ追ひかけ。ツレは仕手柱の際まで來て祈り居り。振りかへりみてワキを追ひ返し。此度は一の松に立ちて打杖振り上げワキとツレとをねめつけ段となる。ワキは跡しさりに舞

イノリ

鱗落し

臺に歸りて仕手柱の内にあり。太皷のナガシと共にシテは仕手柱に背中おしつけ。ぐるりと柱を一まはりして舞臺に入る。これを柱卷といへり。舞臺に入りては脇正面より再脇座の方へ追ひゆき。振り返り鐘を見上げて兩手にて引きおろさんとするを。ワキ走りよりて數珠にて打ち伏せる。是にてイノリ濟み。シテ直に立ちて拍子ふむと同時に。「謹請東方青龍清淨」の地歌ひ出し。角へゆき左へまはり又打杖上げてワキを追ひゆき。祈られて跡しさりし。飛びかへりて。「鐘に向つてつく息は」と打杖左の肩へ上げて鐘を見上げ。「猛火となつて其身を燒く」と。打杖上げて我身を指しながら走りゆきて。「日高の河波深淵に飛んでぞ入りにける」と幕の中に飛び入り。幕直におるゝ。かくて舞臺にては。「望足りぬと驗者達は。我本坊にぞ歸りける」と。ワキ仕手柱先に出て。イウケン扇して拍子踏み留むるなり。

柱卷

キリ

走り入る

脇留

富士太皷

作物　羯皷臺

シテ　富士の妻
深井　葛　葛帶　指　腰卷　腰帶　水衣
扇　笠　物着に烏甲舞衣
子方　富士の娘
葛　葛帶　唐織着流し
ワキ　官人
大臣烏帽子　大口　狩衣　腰帶　扇
アヒ　下人
狂言上下　扇

攝津の住吉に富士といふ樂人あり。内裏の管絃に太皷の役者たらん事を志願して上京せしが。既に天王寺より淺間といふ樂人

召されて參りゐたる事とて。淺間は富士が傍若無人なる振舞を怒り。これを殺害せしに。妻子はるゝ尋ね來て此くと聞き。嘆き悲しむ事甚しく。形見と殘れる舞の衣裳を着て心發狂し。あれこそ夫の敵よとて太皷を打ち。富士の幽靈來り助けて樂を舞はしむる事を作れり。狂女ものゝ一つにて太皷なし。季節は秋。土地は都。

作物出づ
ワキ名乘る

大小座に着くと羯皷臺に撥を挾み正面先に出だす。樂太皷の心なり。ワキ出てゝ名乘をなし。富士がゆかりの者の尋ね來らば。形見を遣はさばやと思ふよしを述べ。脇座に座つく。

シテ子方次第にて出づ

次第にて子方を先に立てシテ出て來り。橋掛にて向き合ひ同音にて。「雲の上なほ遙なる。〳〵。富士のゆくへを尋ねん」と歌ふ。シテは笠を着て旅路の躰なり。

シテの名乘

地取にてシテ正面むき。「是は津の國住吉の樂人。富士と申す人の妻

道行

都に着く

や子にて候。さても内裏に七日の管絃のましますにより。天王寺より樂人召され參る由を聞き。童が妻も太皷の役。」是より二人同吟にて。「世にかくれなければ。望み申さん其ために。都へ上りし夜の間の夢。心にかゝる月の雨。」下歌になりて。「身を知る袖の涙かと。明かしかねたる夜もすがら。」上歌「寐られぬまゝに思ひ立つ。〳〵。雲井やそなた故郷は。跡なれや住吉の。松のひまよりながむれば」と。後に振り返り見る心にて。右の方受け笠に手を掛けて遠くながめやり。「月おちかゝる山城も。早近づけば笠をぬぎ」と。文句に合はせて笠を脱ぎ持ちて。「八幡に祈り掛帯の。結ぶ契の夢ならで。うつゝに逢ふや男山。都に早く着きにけり」と着足ありて。此所にて富士の御ゆくへを尋ねんとの文句あり。子方と入り替りて舞臺に向ひ案内を乞ふと。狂言出て來り。モンダイありてシテを待たせ。入りてワキに告ぐ。ワキ面會すべきよしをいひ。狂言其由を傳へて入ると。

ワキ對面す

シテは笠を捨て。子方を先にして舞臺に入り仕手柱先までゆくと。ワキ「富士がゆかりと申すは何くにあるぞ」と問ひ掛く。「是に候」とてワキに向けば「富士が爲め何にてあるぞ。」「恥かしながら妻や子にて候。」「なふ富士は討たれて候よ」と聞きて。シテ力强く「何と富士は討たれたると候や。」と問ひ返す。「中々の事富士は淺間に討たれて候」と繰り返されて。「されればこそ思ひ合はせし夢の占。重ねて問はゞ中々に。淺間に討たれ情なく」と。恨を帶びて詰足し。地に渡して。「さしも名高き富士は。など。烟とはなりぬらん」と正面へ直し面伏せて悲しむ心あり。「今は思へば其かひも」と面上げ。「なき跡に殘る思子を」と子方を見。「見るからにいとゞ猶。進む涙はせきあへず」と打ちしをる。

富士の討たれたるよしを聞く

形見を見て悲しむ

ワキ之を見て。今は嘆きてもかひなければ。富士が形見の裝束を見て心を慰めよとて。烏甲と舞衣とを持ち出てゝ渡すを。シテ受取り

富士太鼓

物狂
妻の心亂れて太鼓を打たんといふ

て下に居。よく〳〵見て。今までは田舍の者とて偽らるゝかと思ひしに。夫の形見の品々を見て今は疑ふべからず。かの人故郷を出立せし時。御身は住吉の樂人なれば。明神に奉仕する外に。何をも望み給ふまじきよし諫め申しつるに。用ひ給はで出て行き給ひし面影は。身に添ひて忘られぬものをと。返らぬ恨を打ちつゞけて泣く。此間に心亂れて物狂となりたる躰なり。

物着ありて裝束着せは舞衣烏甲を着せ終ると。シテは正面先なる太鼓を見て。「あら恨めしや如何に姫。あれに夫の敵の候ぞやいざ打たう」と歌ひながら立ちて太鼓の前へ行かんとするを。子方は押し留めて。「あれは太鼓にてこそ候へ。思ひの餘りに御心亂れ。筋なき事を仰せ候ぞや。あら淺ましや候」といひて子方泣く。シテ「うたての人の言ひごとや。あかで別れし我夫の。失せにし事も太鼓ゆゑ。唯恨めしきは太鼓なり。夫の敵よいざ打たう。」子方「げ

に理りなり父御前に。別れし事も太鼓ゆゑ。さあらば親の敵ぞかし。打ちて恨を晴らすべし。」シテ「童が爲めには夫の敵。いざやねらはん諸共に。」子方「男の姿狩衣に。物の具なれや鳥甲。」シテ「恨の敵討ちをさめ。」子方「鼓を苦に。」シテ「埋まんとて」と詰足して。子方を太鼓の前へ連れゆき。撥を抜きて子方に持たすと。子方は分けて兩手に持ち。太鼓に向ひて打つ。シテは仕手柱の方へゆき。立ち返り太鼓を見て。「打てや〳〵と攻鼓」と乘込拍子ふみ。「あらさてこりの泣く音やな」と下りて打ちしをり。「猶も思へば腹立や」と据拍子ふみ。「けしたる姿に引きかへて」と正面出て。「心言葉も及ばれぬ」と拍子ありて。「富士が幽霊きたると見えて」と橋掛の方を見る。夫の亡霊現はれ來りて。是より妻の身に附き添ひ樂を舞はする心なり。「よしなの恨や。もどかしと太鼓打ちたるや」と。シテは扇懐中して太鼓の側へゆき。子方を押しのけ撥を受取りて太鼓を打つ。子方は地の前にゆきて着座し。シテは大小前まで下りてホウヒイと達拜し樂になる。

子方に太鼓を打たす

シテ太鼓を打つ

樂の替

樂の後

樂には盤渉之樂といふ習あり。譜のかはると共に拍子の踏方なども常とはかはりて面白く。又觀世流にては現之樂。喜多流などにては狂亂之樂とて緩急などある傳授事もあり。

樂すみて「持ちたる撥をば劍と定め」と歌ひながら撥見て。返しより開き。「噴恚の焔は太鼓の烽火の」と。正面なる樂太鼓の上を見上げ。「鼓の富士おろしに」と霞の扇して出て。「絶えず採まれて据野の櫻」と指して廻り。「四方へばつと散るかと見えて」と。撥高く上げ兩方へ引き分くる心にて右左と面使ひ拍子ふみ。「花衣さす手も引く手も」と指し分けして角へゆき。「伶人の舞なれや」と左の袖かづきて拍子ふみ。「太鼓の役はもとより聞ゆる。名の下むなしからず」と左へ廻り太鼓の前につか〳〵と出て。太鼓をしかと見て。「たぐひなやなつ

かしや」とたら〳〵と下り。撥を捨てゝ打ちしをる。舞の間は暫く忘れぬたりしが。曲終りて又この形見の太皷に向ひ。懐舊の涙に咽ぶ樣なり。

打切にてシテはくつろぎ。後見は笛座の方より出でゝシテの投げ捨てたる撥を取り。ロンギになりてシテ扇ひろげ常座に立ち。「修羅の太皷は打ち止みぬ。此君の御命。千秋樂と打たうよ」とワキの方へ開き。「さて又千代や萬代と。民も榮えて安穩に」と角へゆき。「太平樂を打たうよ」と脇座の方へゆき。「日もすでに傾きぬ。〳〵。山の端をながめやりて」と。雲の扇して橋掛の方を高く見。「招きかへす舞の手の」と。招扇して出て。右に廻りて。「うれしや今こそは思ふ敵は打ちたれ」と。正面へつか〳〵と又出でゝ扇にて太皷一つ打ち。「打たれて音をや出だすらん」と。太皷をしかと見て。「我には晴るゝ胸の烟。富士が恨を晴らせば」と。イウケンしながら下り。「涙こそ上なかりけれ」と。下に居て打ちしをる。

「これまてなりや人々よ」とワキに向き。「これまてなりや人々よ。暇申してさらばと。伶人のすがた烏甲。皆ぬぎすてゝ我心」といふ間に。烏甲も舞衣も脱ぎ扇もすてゝ。後見の持て來たる笠を持ち立ちて「亂笠みだれ髪」と拍子ふみ。直に一の松までゆき。「また立ち歸り太皷こそ。うき人の形見なりけれと」と。笠を兩手にさし上げてかざし。舞臺の太皷を名殘をしげに見おきて。「跡見おきてぞかへりける」の返しに手おろし。右の方受けて笠を胸の處に當て持ちて拍子ふみ留むる。

土蜘

前ジテ　僧

能のしなり　三の卷

作物　山　巣を掛く

直面　沙門帽子　厚板　水衣　腰帶　巢を隱し持つ

頼光

黑風折　箔　大口　扇　長組袴ろ流儀もあり

太刀持

素袍上下　小サ刀　常扇　太刀持つ

女ヅレ　胡蝶

女面　唐織若流し

前ワキ　一人武者

折烏帽子　厚板　大口　掛直垂　小サ刀　扇

後ジテ　土蜘の精魂

蟹　赤頭　厚板　半切　法被　腰帶　巢を持つ

後ワキ　前と同人

白鉢卷　厚板　半切　法被　腰帶　太刀

ワキヅレ二人　同行武士

白鉢卷　厚板　大口　太刀

アヒ　觸男

狂言上下肩ぬぎ　脚半　小サ刀　杖つく

源頼光病の床に伏しゐたるに怪異なる僧形の者訪ひ來り。枕邊に近づくと見る間に蜘を打ちかけしかば。刀を拔いて切り拂ひ。暫く戰ふ程に姿は失せぬ。よりて侍臣に命じて其血のあとを尋ねゆかしめ。葛城山なる巢窟を見出だして其土蜘の精魂を退治する事を作れり。太皷あり。季節なし。地は初め都。後は大和。

囃子方座に着くと一疊臺を脇座の方に出だし。頼光いでゝ其上にあがり安座し。葛桶に左の手を載せ。肩より下に箔を掛けて。病床にある躰を示す。太刀持は頼光に附いて出て。頼光の臺に上る間仕手柱に下居て待ち。安座すると太刀を頼光の左の方に置く。地の前にゆ

頼光出づ

土蜘

きて座つく。

次第にて女ヅレ出て。「うきたつ雲」の謠すみて。是は頼光の御内に仕へ申す胡蝶なるが。只今典薬の頭より御薬を持ちてかへるよしを述べ。太刀持に其旨を告ぐると。御機嫌を見て申し上ぐべしといはれ。仕手柱に下に居る。

頼光「こゝに消えかしこに結ぶ水の泡の。浮世にめぐる身にこそありけれ。」云々といひて病の苦しみを獨りごつと。

シテ出づ

太刀持手をつきて胡蝶の參れるよしをいひ。こなたへ來れといはれて胡蝶御前に進む。「御心地は何と御座候ぞ」と問へば。「昨日より心も弱り身も苦しみて。今は期を待つばかりなり」と答へ。それより慰むる文句などありて地になり。「げにや心を轉ぜず。そのまゝに思ひ沈む身の」と。謠の内に胡蝶は立ちて切戸より入り。シテは幕上げさせて橋掛に出づ。

シテは地の謠すみ一聲にて出づる事もあり。地の内にて出づる時は一聲の囃子はなし。

「胸を苦しむる心と。なるこぞ悲しき」と。一の松に立ち正面むきて。「月清き。夜半とも見えず雲霧の。かゝれば曇る心かな」と。歌ひ。「いかに頼光。御心地は何と。御座候ぞ」と頼光を見る。頼光「不思議やな誰とも知らぬ僧形の。深更に及んで我を訪ふ。其名は如何に覺束な。」シテ「おろかの仰せ候や。惱み給ふも吾背子が。來べき霄なり

頼光と戰ふ

さゝがにの。」と言ひながら靜々と舞臺に入り。頼光「蜘の振舞かねてより。知らぬといふに猶近づく。姿は蜘蛛の如くなるが」と仕手柱に立ちて。「かくるや千筋の糸筋に」と頼光目がけて巣を投げ出すと。頼光「五躰をつゞめ。」シテ「身を苦しむる」の文句ありて。「化生と見るよりも」の返しに。頼光箔はねのけて太刀を取り居立ちてシテを見。「枕にありし膝丸を」と拔き放し。臺より飛びおり。シテと切りちがひて頼光は仕手柱にゆき。シテは臺の上にあがり。「そむくる處を縫けさまに」と二人一所に拍子ふみて。頼光近づき据を拂へば。シテは臺より飛びおり。此時中返をするもありて橋掛へ走りゆき直に幕に入る。頼光は一の松あたりにまて追ひゆき。幕の方を見込み。舞臺に歸りて臺に腰掛け居る。

巢は「かくるや千筋の」にて掛けざる流儀もあり。又切りちがひ臺に上りて掛くるも。又は幕に入らんとする前。振り返り見

人違之傳

て掛くるもあり。

觀世流にては入違之傳といふありて。シテ幕に入らず。「形は消えて」にて後見座にくつろぎ居ると。ワキ出て來るを見てシテ立ち。橋掛を行きちがはんとす。ワキ足とめて振り返り見る時。シテ巣を一つワキに投げ掛け直に幕に入る。此時頼光仕手柱まで追ひ來るのみなり。

ワキ早皷にて出づ

諸切るゝと早皷となりてワキ早足に出て。頼光の前に手をつきて。御聲の高く聞えし程に馳せ參じたるよしをいふ。頼光やがて有りたる通りを物語り。かゝる化生の物を追ひ退けしも偏に劍の奇特なれば。今より此膝丸を蜘切と名づくべしといふに。ワキも目出度き御事なりと祝し。御太刀つけの跡に血のけしからず流れて候へば。これをたんだへて化生の者を退治仕らうずるといひ。頼光急ぎ參るべしと下知して。又早皷となり。頼光太刀持ワキ共に幕に入る。

アヒ

後ツテの入りたる作物出づ

後ワキ出づ

アヒ出てゝ以上ありたるまゝの物語を獨言にいひ。我等も御供に參らうとて是までは出てたれども。化生の者ぢやによつて。何に化けて命を取らうも知れぬ。入らぬ武邊立をして二つとも無い命うしなうてはなるまい。只これから歸らう」などいふ滑稽ありて。是まで出てたるしるしに各へ催促致さうとて。「おのおのは早甲冑を帶し御出なされ候間。御供の人々はとう〳〵出でられ候へ。皆々其分心得候へ〳〵」と觸れて入る。

山に巣を張り引廻かけたる作物を大小前に出だす。シテ此中に入りて出づるなり。

一聲にてワキとワキツレと出てゝ橋掛に並び。同音に。「土も木も。わが大君の國なれば。何くか鬼の宿りなる」と歌ひ。それより文句かず〳〵ありて地になり。舞臺に入りて左右に分れ。土蜘の住む塚を崩す心にて。左右に分れ作物に向ひ居ると。「あやしき岩間の陰よ

引廻おりシテあらはる

舞働

り。鬼神の形はあらはれたり」と。作物の引廻おりて鏨の面に赤頭の姿なる後ジテは。蜘蛛の巣を張りわたしたる中に両手つきて。

「汝知らずや我むかし。葛城山に年を經し。土蜘の精魂なり。猶君が代に障をなさんと。頼光に近づき奉れば。却つて命を斷たんとや」

と恨めしげにも歌ひ出だす。

「その時獨武者進み出て」とワキ少しシテに近より。「手に手を取り組み掛かりければ」と。ワキヅレ手を引き合ひてかゝらんとすれば。

「蜘蛛の精霊千筋の糸を繰りためて。投げかけ〳〵白糸の」と。シテは巣を打ち破りて半ば身を出だし。手に持ちたる巣を投げ掛け。

「手足にまとはり五體をつゞめて。倒れ伏してぞ見えたりける」と。ワキはよろめきながら踏みとむる形などありて。舞働となる。シテ作物より出て仕手柱にてワキに向ひ開き。ワキと打ち違ひ。ワキは橋掛へ。シテは脇座へ行き。それより脇正面に立ち居るワキヅレの中を通りてシテも橋掛にゆき。ワキと打ち合ひ追ひ廻りて舞臺に歸り。作物の前にて正面へ開きとむると。ワキ「然りとはいへども」と歌ひ出だし。「かの土蜘を中に取り込め。大勢亂れかゝりければ」と。左右に分れて。シテの前に刀をさしいだすと。「劍の光に少し恐れて」とシテははづして廻り安座すると。「切り伏せ〳〵」とおのおの刀にて切りつけ。「首打ち落し」とワキ又切りて。「よろこび勇みて」と仕手柱にて開き。刀かたげて留むる。働の間にも。又キリの中にも。巣を出だす事たび〳〵なるもあり。一度二度くらゐなるもあり。シテにも依るべし。流儀にも依るべし。

キリ

西王母

前ジテ　女

能のしをり　三の卷

前ヅレ　侍女　　増　葛　葛帶　唐織若流し　桃花の枝かたぐ
　　女男　葛　葛帶　唐織若流し

ワキ　帝　　色鉢巻　唐冠　厚板　大口　狩衣　腰帶　唐團扇

ワキヅレ二人　官人　　大臣烏帽子　厚板　大口　狩衣　腰帶　扇

後ジテ　西王母　　増　天冠　黒垂　箔　色大口　長絹　腰帶　扇　太刀佩く

後ヅレ　侍女　　女面　葛　葛帶　唐織の上に側次　桃の實盆に載せて持つ

西王母といふ仙女天より降り來りて三千年の桃實を帝に捧げ奉り。曲水の宴のさまなど學びて舞ひ遊ぶ事を作れる能なり。太

ワキ出づ

シテ出づ

皷あり。季節は三月。地はもろこし。

後見二人にて、疊臺を脇座の方に出だし。屋臺を立て宮殿に擬すると。狂言の口明ありて來序となり。ワキ出て〻臺の上に床几にかゝり。ワキヅレ脇正面に下に居ならび。地の謠になりて地の前に座つく。

一聲にてツレ先に立ち。シテ桃の作花をかたげて出て。橋掛にて向き合ひ。「桃李物いはず。下おのづから市をなし。貴賤まじはり際もなし」と同吟し。舞臺に入り。ツレは眞ん中に。シテは仕手柱に立ちてサシを歌ひ。上歌の終になりて入り替り。シテは眞ン中に。ツレは右の先の方に出て〻立ち。シテはワキに向ひ桃の花を兩手に持ちて。「是は三千年に花さき實なる桃花なるが。今此御代に至り花さく事。たゞ此君の御威德なれば。仰ぎて捧げ參らせ候」といひ。掛合いろ〳〵ありて。「三千年に。なるてふ桃の今年より」の初同にな

ロンギ

り。出て開きなどし。「もゝ花の色ぞ妙なる」の打切にてくつろぎ。桃の花を後見に渡す。

ロンギになりて。「疑の。心な置きそ露の間に。宿るか袖の月の影。雲の上まで其めぐみ」と上を高く見。「あまねき色に移り來ぬ」とワキに向く。それより角取り廻りて。「誠は我こそ西王母の。分身よまづ歸りて」と。左の袖いだしてワキへ開き。「花の身をもあらはさんと。天にぞあがりける」と。右へ廻り仕手柱にて開き中入す。ツレも附き

後シテ出

て入る。

ワキの待謠すみ。下羽にてシテ出てゝ舞臺に入り。左右打込して開くと。地より「面白や。〳〵。かゝる天仙李王の」と歌ひ出だす。ツレはシテの跡より盆に載せたる桃の實を捧げて出て。一の松に立ち居る。

「孔雀鳳凰迦陵頻伽」と右の方を見まはし。「立ち舞ふや袖の羽風。天つ

中之舞キリ

空の衣ならん。天の衣なるらん」と。左右打込して開き。「いろ〳〵の捧物」の返しより角にゆき。「西王母の其姿」と左の袖かざして左にまはり。其ン中にて「剣を腰にさげ」と佩きたる太刀を見。「其櫻の冠を着」と頭を扇にて指し。「玉觴に盛れる桃を。侍女が手より取りかはし」と。ツレの方へ行くと。ツレも舞臺に來りて盆の桃をシテに渡し地の前にゆき座す。シテは受取りて。「君に捧ぐる桃寶の」と歌ひながら。ワキの前にゆき。下に居て臺の上に桃を置き。「花の盃とりあへず」と立ちて右にまはり。仕手柱にて大小の方へ行きかゝり。破掛り中の舞を舞ふ。

舞の留は左右打込にて。「手まづ遮る曲水の宴かや御川の水に」と正面へ出て。下を見て開きすわり。「たはむれたはむるゝ」と前へ臥膝して二足出て。「袖も裳裾もたなびきたなびく」と立ちて左へ廻り。「雲の花鳥春風に和しつゝ」と指し分けして乘り込み。「王母も伴なひ立ちのぼる」と脇座より仕手柱へ扇にて指しゆき。かざし廻りて開き。袖返し留拍子常の如し。

籠

前ジテ　男
　直面　熨斗目　大口　掛素袍　腰帶　扇
　肩にて水衣なるもあり。
ワキ　僧
　角帽子　熨斗目　水衣　腰帶　扇　數珠
後ジテ　梶原源太景季
　平太　梨子打烏帽子　黑垂　厚板　牛切　法被　腰帶
　太刀　扇　梅花の枝を後にさす

アヒ　處の人

狂言上下　扇

生田の森の合戰に梅花をかざして譽れをあらはしたる梶原源太の亡靈いでて。旅僧に昔を語り軍のさまをまねびて見する事をつくれり。勝修羅三番の一つにて祝言の能に用ひらる。太鼓なし。季節は二月。地は攝津。

ワキ出つ

次第にてワキ出で。「春を心のしるべにて。〳〵。うからぬ旅に出てうよ」と歌ひ。地取あり。名乘道行すみて脇座に着く。

シテ出つ

シテ又次第にて舞臺に入り。例の如く大小の方むきて。「來る年の矢の生田川。〳〵。流れて早さ月日かな」と歌ひ。サシより下歌上歌の獨吟ありて。「よしとても身のゆくへ。定めありとても終には」と脇正面受けて三足ほど出て。「夢の直路にかへらん。〳〵」と。正面直すと。ワキ詞を掛けて。「是なる梅は名木にて候か」と問ふ。作物は出だされども。正面の方に梅の木のある心なり。箙の梅といふよしをシテ答へいつの代よりの名木ぞとワキ問ひ。梶原源太景季箙にさして高名人にすぐれしかば。八幡の神木と敬せしよりこのかた。名將の古跡の花なりとて。箙の梅とは申すなりとシテ答へ。「名をとめし。あるじは花の景季の。〳〵。末の世かけて生田川の。身を捨てゝこそ。名は久しけれ武士の」と出でゝ開き。「やたけ心の花に引く。弓筆の名こそ妙なれや。〳〵」と左へ廻りワキへ開き眞ン中へ行き座す。

ロンギ

それより當時の軍物語をなす心にて。クリよりサシクセと文句ながくありてロンギとなり。「はや夕ばえの梅の花。月になりゆく假枕。一夜の宿をかし給へ」と地。「我は宿りも白雪の。花のあるじと思召さば。下臥に待ち給へ」とシテ。「花のあるじと思へとは。御身いかなる人やらん」と地。「今は何をか包むべき。我は此世になき影の」

中入

後ツテ

とシテ。「跡とはれんと夕草の」と地。「その景季が幽靈なり」とシテ。「おん身他生の緣ありて」と地になりて立ち。「一樹の陰の花の緣に」と正面へ開き。「鶯宿梅の木のもとに」と正面なる梅を見て。「宿らせ給へ我は又」とワキに向き。「世を鶯のねぐらは。此花よとて失せにけり」と右にまはり仕手柱にて開き。返しに橋掛にゆきて中入す。

アヒ出てゝ聞き及うだる物語をなすこと例の如くありて。ワキ待謠を歌ふ。「うば玉の。夜の衣をかへしつゝ。〳〵。更けゆくまゝに生田川。水音もすむ夜もすがら。花の木陰に伏しにけり。〳〵」と。終りて一聲になりシテ出づ。

仕手柱にて。魂は陽にかへり云々と歌ひ。「血は涙鹿の川となり」と右受けて。紅波栉を流しつゝ」と正面へ開き。「白刃骨を碎く苦しみ」と拍子ふみて角へ行き。「長夜の闇々と眼もくらみ」と扇卷き込み顔に當てゝ廻り。「修羅道の苦しみ御覽ぜよ」とワキへ開く。

カケリ

キリ

それよりワキとの掛合ありて。「今は何をか包むべき。是は源太景季。他生の緣の一樹の陰に。夢中の對面向顏をなす。御身たつとき人なれば。法味を得んと魂靈の。魂にうつりて來りたり」とワキへ向ひて開き。「跡とひ給へといはんとすれば」と拍子踏み。カケリとなる。修羅道にての闘爭のさまなり。

トメは小廻りして「又嗔恚の敵の責。あれ御覽ぜよ御ひじり」とワキに開き。ワキの「げに〳〵見れば恐ろしや。劍は雨と降りかゝつて」といふ間に扇ひろげ。シテ「天地をかへす如くにて。」ワキ「山も震動。」シテ「海もなり。」ワキ「雷火も亂れ。」シテ「惡風の」と行きかゝり。「紅烟の旗をなびかし」と指し廻し。返しに拍子ふみ。「閻浮にかへる生田川の。波を立て水をかへし山里海川も。皆修羅道の街となりぬ」と。大左右して指す形などありて。大小前にて小廻りし

扇打合はせて。「こはいかに淺ましや」と下を見て打ちすわる。

「暫く心を靜めて見れば」と歌ひ。地の「心をしづめて見れば」になりて、居立ち正面をながめやり。「時も昔の春の。梅の花さかりなり」と胸ざしゝて開き。「一枝たをりて箙にさせば」と。梅を折る心にて扇折りかへし。手をうしろに廻して箙にさすやうにして右に廻り。「もとより雅びたる若武者に。あひあふ若木の花かづら。掛くれば箙の花も源太も」と。角にて扇高く上げて花かづらの心にて見つゝ左へ廻り。「我さきかけん〳〵との心の花も梅も」と正面先へつか〳〵と出て。「散りかゝつて面白や」と跡に下り。イウケン扇して花の散るにながめ入る心あり。

「敵の兵これを見て天晴敵よ逃すなとて」と氣を替へて。地の前より角の方に敵兵を見て開き。「八騎が中に取りこめらるれば」と拍子勇ましくふみ。「かぶとも打ち落されて」と扇上げて頭をさし。「大竜

の姿となりて」と仕手柱まて行き。「郎等三騎に後を合はせ」と。扇左に取り楯として太刀ぬき橋掛の方を見かへり。「向ふ者をば」と脇座の方へ楯にて押しゆき。「拝み打ち」と一つ切り。「又めぐり合へば」と一つ廻りて行きかゝり。「車ぎり」と左に切り拂ひながら飛びかへり。「蜘蛛手かく縄十文字」と二つ切りて拍子ふみ。跡「鶴翼飛行の秘術を盡すと見えつる内に夢さめて」と跡へ下りて臥膝し廻り。「白々と夜もあくれば」と雲の扇し。「是までなりや旅人よ」とワキに開き下に居て辭儀をなし。「暇申して花は根に」とさして廻り。仕手柱にて小廻り開き。拍子ふみて例の如く留むる。

草子洗小町

前ジテ　小野小町　　作物　文臺

小面　葛　葛帶　箔　唐織着流し　扇

前ワキ　大伴黒主

風折烏帽子　厚板　大口　長絹　腰帶　扇

アヒ　太刀持つ

狂言上下　太刀持つ

後ジテ　小野小町

緋大口に唐織霊折　外は前ジテに同じ。

王(子方)

冠　箔　緋大口　狩衣　腰帶　扇

貫之

風折烏帽子　厚板　大口　狩衣　腰帶　扇

男ヅレ二人　躬恒忠岑

貫之に同じ。

女ヅレ二人　官女

後ジテに同じ。

後ワキ　大伴黒主

前ワキの長組ナ狩衣に替へ草子懐中す。

内裏において御歌合の御催ありとて。大伴黒主を小野小町の相手と定められしに。黒主は實力にてはとても叶はじと思ひ。前日小町が歌を隠れ聞きて萬葉集の草子に書き入れ。之を當日持参して小町が歌は古歌なりと強ひたるに。遂に其草子を洗ふ事となりて。新しき入筆の文字は消え失せしかば。黒主は面目を失ひて自殺せんとせしを。小町は留め。帝よりは座敷に直れとの宜旨ありて。めでたく平和に歸し。小町舞を奏して和歌の道の隆盛を祝ふ事を作れる能なり。太鼓なし。季節は四月。地は都。

ワキ名のる

シテ出でゝ舞臺に入り笛座の前に床几にかゝるとワキ出でゝ。「是は

シテ歌ひ出だす

ワキ耳を傾けて聽く

大伴の黒主にて候。さても明日内裏にて御歌合あるべきとて。黒主が相手には小野の小町を御定め候。小町と申すは歌の上手にて。更に相手には叶はず候程に。明日の歌を定めて吟ぜぬ事は候まじ。彼私宅へ忍び入り。歌を聞かばやと思ひ候」といひて。後見座にくつろぐ。狂言も附きて出て同じくくつろぐなり。

ワキすわるとシテ「それ歌の源を尋ぬるに」と歌ひ出だす。私宅にありて和歌を苦吟しつゝ考へ居るさまなり。此間にワキは狂言と共にそと立ちて一の松にゆき。小町の吟聲を聞かんと熱心に耳を傾け居る。ある人この時のワキの樣子を評して。松虫聞きに出てたる趣ありといひしは。いかにも優美に見えたればならん。

シテは舞臺に入らずして三の松あたりに立ち。正面むきて歌ふ事もあり。其時はワキくつろぎてから出て。橋掛がシテの私宅なれば。ワキは仕手柱内にて聞き居る。

中入

後ジテ次第にて出つ

シテ「水邊の草といふ題を給はりたり」と少し考ふる心にて「面白や水邊の草といふ題に浮びて候は如何に」と面上げて「まかなくに何を種とて浮草の。波のうね〳〵生ひ茂るらん。此歌をやがて短冊に寫しさむらはん」といふを聞きて。ワキ「いかに只今の歌を聞いてあるか」と狂言にいへば。「さん候承りて候」と答ふ。ワキ「何と聞いてあるぞ。」狂言「まかなくに何を種とて瓜づるの。畠の畝をまろびころびあるくらん。」ワキ「いや左樣にてはなきぞ。道の道たるは常の道にはあらず。知れるを以て道とす。不得心なる事にて候へども。只今の歌を萬葉の草子に寫し。帝へ古歌と訴へ申し。明日の御歌合に勝たばやと存じ候」といひて中入す。シテも中入す。

シテ橋掛の時はシテ先にワキ跡より入るなり。

後は次第にて。王。シテ。躬恒。女ヅレ。忠岑。女ヅレ。貫之。ワキ。と出て來り。舞臺にて向き合ひ。「めでたき御代の歌合。〳〵。詠じて君を仰がん」と歌ひ。地取にて皆座に着き。王は脇座に床几にかゝり。貫之男ヅレとワキとは其下に大小前かけて順に並び座し。シテと女ヅレとは脇正面の方に王に向ひて座す。それより立衆「時しも頃は卯月なかば。清涼殿の御會なれば。花やかにこそ見えたりけれ。」貫之「かくて人丸赤人の御影を掛け。」立衆「おの〳〵よみたる短冊を。吾も〳〵と取り出だし。御影の前にぞ置きたりける」といふ時。男ヅレ立ちて文臺の作物に。短冊載せたるを正面先に出だす。貫之「さて御前の人々には。」立衆「小町を始め河内の躬恒紀の貫之。」貫之「衛門の府生壬生の忠岑。」立衆「左みぎりに着座して。」貫之「既に詠をぞ始めける」と。是より前に貫之立ち文臺の前に安座し。御影の神詠を讀む心にて。「ほの〳〵と。明石の浦の朝霧に。島がくれゆく舟をしぞ思ふ」と歌ひ。初同すみて王は貫之に。「まづ〳〵小町が歌を讀み上げ候へ」といふ。貫之文臺の短冊を一枚取り上げ

小町の歌を讀み上げく

ワキ古歌なりと訴ふ

て。「まかなくに」の歌をよむと。王は「面白とよみたる歌や」と褒め。「此歌にまさるはよもあらじ」といふを押し留め。ワキ「是は古歌にて候」といふ。王「何と古歌と申すか。」ワキ「さん候。」王「いかに小町。何とて古歌をば申すぞ」といはれ。シテ「耻かしの勅諚やな。先代の昔はそも知らず。既に衣通姫この道の捨たらん事を嘆き。和歌の浦わに跡を垂れ給ひ。玉津島の明神よりこのかた。皆此道をたしなむなり。それに今の歌を古歌と仰せ候は。古今萬葉の勅撰にて候か。又は家の抄にてあるやらん。作者は誰にてましますぞ。委しく仰せ候へ」と。是よりワキとの問答ありて地となり。「さらば證歌を出だせとの。宣旨たび〳〵下りしかば。始めは立春の題なれば。花も盡きぬと引き開く。夏は涼しき浮草の。是こそ今の歌なりとて。既に讀まんとさしあぐれば」と。王はワキに向ひ。ワキは宣旨を奉じて。懐中より草紙を出だし。シテの前に行きてしかと見せて

シテ草子を洗はんといふ

前に置き座にかへる。

「わが身にあたらぬ歌人さへ。胸に苦しき手を置けり。ましてや小町が心の内。たゞ源の橋うち渡りて。危き心は隙もなし」と。シテは面伏せたるが。又上げて。「恨めしや此道の大祖。柿の本の大夫も。小町をば捨て果て給ふか。」と歌ひ。「うらめしやな」と面下げて打ちしをる。此邊の餘情いふにいはれぬ處なり。

かくて「此草子を取上げ見れば。行の次第もしどろにて。文字の墨刷たがひたり」と手に取り見て。少し安心したる如く。草子をおろして面を上げ。「いかさま小町ひとり詠ぜしを黒主立聞し。帝へ古歌と訴へ申さんために。此萬葉に入筆したると覺えたり」と。又草子を上げ見て貫之に向ひ。「餘りに耻かしう候へば。此草子を洗はゞやと思ひ候」と述べたれども。許されざれは。「とにかくに思ひ廻せども。やる方もなき悲しさに」と面伏せ。「泣く〳〵立つてすご〳〵と。

洗へとの勅諚下る

歸る道すがら。人目さがなや耻かしや」と。しをりながら橋掛へゆくを。「小町暫く御待ち候へ」と呼び留め。其よし奏聞して見んとて王の御前に至り。草子を洗ひて見たきよし小町の申す事を述べ。勅諚を得て再び橋掛の際まて行き。「いかに小町勅諚にてあるぞ。急いで草子を洗ひ候へ」といひ。本の座にかへる。

シテは草子を前におき一の松にて下に居たりしが。かくと聞きて。さも嬉しげに面上げ。「綸言なれば嬉しくて。落つる涙の玉だすき。結んで肩に打ち掛て。既に草子を洗はんと」と。兩手に草子を取り上げ。「和歌の浦わの藻鹽草。〳〵。波よせかけて洗はん」と。舞臺に入り仕手柱にて開く。此地返しにて後見文臺を取るなり。

シテ「天の河瀬に洗ひしは。」地「秋の七日の衣なり。」シテ「花色衣の袂には。」地「梅のにほひや交じるらん」と。左右打込開きありてロンギとなる。洗はんとする心を歌集の部立によせ歌へるにて。優

美さ限なき處なり。

地「雁金の、翼は文字の數なれど。跡定めねば洗はれず。瀬川に耳を洗ひしは。」シテ「濁れる世を澄ましけり。」地「舊昔の鬚を洗ひしは。」シテ「河原に解くる薄氷」と右の下の方を見まはし。地「春の歌を洗ひては。霞の袖を解かうよ」と正面直し。シテ「冬の歌を洗へば。〳〵」と角へゆき。地「袂も寒き水鳥の。上毛の霜に洗はん」と左へ廻り。戀の歌の文字なれば。忍び草の墨消え」と正面むき。シテ「涙は袖に降りくれて。忍ぶ草も亂るゝ。忘草も亂るゝ」と打ちしをり。地「釋教の歌の數々は。」シテ「遂の糸ぞ亂るゝ。」地「神祇の歌は榊葉の。」シテ「庭火に袖ぞかわける。」地「時雨にぬれて洗ひしは。」シテ「紅葉の錦なりけり」と。此間正面へ出て開き。仕手柱へ行きて。地の「住吉の〳〵」より正面へずつと出て。「久しき松を洗ひて。」地「岸によする白波を。」シテ「さつと掛けて洗はん」と。扇ひろげ右の下へ

草子洗小町

草子を洗ふ

を見て水を一つ汲み。左に持ちたる草子の上に流し掛くる仕方をなし。「洗ひ〳〵て取り上げて」と又汲みては流しかくる仕方二度して

能のまなり　三の、卷

草子を取り上げ。「見れば不思議やこは如何に。かず〳〵の其歌の」とよく見まはして。文字は一字も。殘らて消えにけり」と力強くワキを見。「ありがたや〳〵」と立つて少し正面へ出て。「出雲住吉玉津島。人丸赤人の御めぐみかと伏し拜み」と合掌の感謝の心を示し。「よろこびて龍顏に差し上げたりや」と。草子を逆さまに持ち直して立ち。王の前にゆき居立ちて。草子を高く御覽に入るゝやうにして。下に置く。

ワキ自害をせんと立つ

ワキ座にかへる

ワキ此に於て面目を失ひ。「よく〳〵物を案ずるに。かほどの恥辱よもあらじ。自害をせんと罷り立つ」と。座を立ちて仕手柱の方へゆかんとするを。シテ立ちて呼び留め。「二三足ゆき下に居て。「なふなふ暫く。此身みな以て其名ひとりに殘るならば。何かは和歌の友ならん。道をたしなむ志。誰もかうこそ有るべけれ」といひ。王また「苦しからぬ事座敷へ直り候へ」の詞ありて。ワキは座にかへり。シテは正面直して居る。

地「げに有難きみぎんかな。小町黑主遺恨なく。小町に舞を奏せよと。おの〳〵立ちより花の打衣。風折烏帽子を着せ申し。笏拍子を打ち座敷を靜め」と。此間に貫之烏帽子を持ちゆきてシテに着する事あり。終りてシテは仕手柱に立ち。「春來つては遍く是れ桃花の水。」地「石にさはりて遲く來れり。」シテ「手まづ遮る花の一枝。」地「桃色の衣や重ぬらん」と。此間に出て〻開き拍子などふみて。シテ「霞立つ」と歌ひながら仕手柱へくつろぎ。行きかゝり指して破掛の中の舞となる。

中之舞

キリ

「霞立てば。遠山になる朝ぼらけ」と扇横に前に出だし。のけて開く事常の如く。「日影に見ゆる松は千代まで。松は千代まで」と。大左右打込ありて。「四海の波も四方の國々も」とさしまはし。「民のとさしもさゝぬ御代こそ。堯舜の嘉例なれ。大和歌の起りは。荒金の

土にして。素盞嗚尊の。守り給へる神國なれば」と。角より廻り來て真ン中にて開き。「花の都の春も長閑に」と扇にて王を指すと。王立ちて幕に入り。シテ其あとを指しゆきて。仕手柱先にて足とめ。かざし廻りて。「和歌の道こそめでたけれ」と拍子踏み留め。大小の頭と共に扇たゝみ入る。ツレもワキも其あとより入るなり。

唐船

作物　船　帆柱を立て帆を上ぐ

シテ　祖慶官人
小尉　尉髭　小格子　水衣　扇　鞭　縄
物着に唐頭巾　法被　唐團扇
唐子二人　ツンシツイウ
厚板　大口　側次　扇

日本子二人
腰巻　腰帯　腰　鞭うしろにさし　縄持つ
ワキ　箱崎殿
梨打烏帽子　白鉢巻　直垂上下　小サ刀　扇
アヒ　箱崎殿の太刀持
狂言上下
アヒ　舟子
末社頭巾　疑斗目　狂言袴　脚半　側次　扇

もろこしに祖慶官人といへるものあり。船の爭より日本に捕はれ。箱崎殿の下知のもとに牛馬を飼ひつゝ月日を送りしが。日本にても二人の子生れぬ。さる程に古郷に殘されし二人の子ありて。十三年の後たづね來りしかば。箱崎殿もゆるして諸共に歸國させんとせしに。日本子も連れゆきて給へといふ。父が同

ワキ名のる

行せんとするを箱崎殿ならねといふ。歸らんとすれば日本子あり。留まらんとすれば唐子あり。父は進退きはまりて身を投げんとす。箱崎殿も其心を察して目出度く五人の歸國をゆるし。五人は喜び勇みて乘船し。樂を奏しつゝ漕ぎいづる事を作れり。

太鼓あり。季節は七月。地は筑前。

囃子方座につくとワキ出てゝ名乘る。「かやうに候ものは。九州箱崎の何がしにて候。さても一年唐土と日本の舟の爭あつて。日本の舟をば唐土に留め。唐土の舟をば日本に留め置きて候。其舟に祖慶官人と申す者を留め置きて候が。早十三回になり候。某は牛馬をあまた持ちて候程に。彼祖慶官人に申し受け。野飼をさせ候。今日も申しつけばやと存じ候」といひて。太刀持を呼び。「祖慶官人にいつもの如く。牛馬を今日も飼へ。と申し候へ」といひ座につく。太刀持は急ぎ野飼に出づべきよしをいひ是も座につく。祖慶官人の目前に居

舟出て唐子二人乘る

るに對して言ひ渡す心なり。

舟子のアヒ船の作物を持ち出てゝ橋掛に置くと。一聲になりて唐子二人出て舟に乘りて。「もろこし舟の棹枕。夢路ほどなき名殘かな」を歌ひ。サシの內に。是は明州の津にソンシヤウといひ兄弟なる由。あまりの父の戀しさに若しも存命ならんかと尋ね來りし由など述べ。道行には海漫々とこぎいで箱崎に着きたるよしの文句あり。

唐子箱崎殿に對面す

尤も舟子も艙の方に乘り居るなり。

ソンシ狂言を呼びて。祖慶官人に對面申したき由申せといふ。狂言舟を出てゝ案內を乞ふ。太刀持と問答の末。二人入つてワキに對面す。父は今物詣とて出てゝ留守なりといへば。されば是に待ち申さうずる由いひて後見座にくつろぐ。二人おりると狂言舟をうしろに欄干に立て掛けおくなり。

シテ日本子と出づ

シテの出の一聲になり。日本子二人おの〳〵鞭を腰にさし縄を右の

手に持ちて出て。縞きてシテは鞭を右に繩を左に持ちて出て。「如何にあれなる蛮部ども。野飼の手を集めつゝ。早々家路に急ぐべし」と歌ふ。手に持ちたるは牛引く繩にて。親子同じく牛引き連れつゝ野邊より家に歸りゆく道なり。

子もシテに向ひ。「かゝる業こそ物うけれ」とかこち。シテは「よし我のみか天の原。七夕の。喩にも似ぬ身のわざの」と歌ひ。三人同吟にて。「牛ひく星の名ぞしるき。」子二人「秋さく花の野飼こそ。三人「老の心の慰めなれ」と。自ら慰め合ひて睦ましき父子の情を示し。次に故郷の戀しき心より唐土なる二人の子を思ひ出て。されども此地にて生みたる子のなかりせば。老の身を養ふものもなかるべきになど。彼を戀ひ此を痛はり。心は千々に碎けつゝ。「老木の枝は雪折れて。此身の果はいかならん」と。面伏せて物思ひ居る折しも。牛の鳴き立つるを聞き面を上げて。「あれを見よ。野飼の牛の群々に。

ロンギ

艪々に。子故に物や思ふらん」と。鞭にて指して正面を見やり。「況んや人倫に於てをや。我身ながらもおろかなり。〳〵」と二足ほど下りて。「いざや家路に歸らん。〳〵」と子に向き。歸路を促す。子二人「如何に父御よ聞し召せ。さて住み給ふ唐土に。牛馬をば飼ふやらん。御物語り候へ。」シテ「中々なれや唐土の。花山には馬を放し。桃林に牛を繫ぐ。是れ花の名所なり。」子二人「さて唐土と日の本は。何れ優りの國やらん。くはしく語り給へや。」シテ「おろかなりとよ唐土に。日の本をたとふれば。唯今尉が引いて行く。九牛が一毛よ」と。鞭を左の肩に上げ右の方に牛の來るを見て語る心あり。子二人「さほど樂しむ國ならば。痛はしやさこそげに。戀しく思召すらめ。」シテ「いやとよ方々を。設けて後は唐衣。歸國の事も思はずと」と。和氣洋々と打ち語りつゝ歩みを進めて。子は舞臺に入り。地の前に着座し。シテは一の松に足を留めて。「風の音のすくなきは」

シテ舞臺に入る

シテ唐子を呼び掛ける

と高く松の梢を見わたす心ありて。「松原や末になりぬらん　箱崎に早く着きにけり。〳〵」と舞臺に入り。仕手柱先にて子方に向ひ。謠切るゝとくつろぎて鞭と繩と捨て。扇持ちて仕手柱へ出づると。ワキ呼び掛けて其歸りの遲きを問ふ。それより三言四言モンダイありて。「お事は唐土に二人の子を持ちてあるか」と問ひ。其そんしそいうが尋ねて來り。數の寶に替へ連れて歸國せんとするよしを語る。さらば其舟を見んとて仕手柱の方へゆき。橋掛の方を見て。いかにも我舟なるを認め。「あまりに見苦しく候程に。引きつくろひて給はり候へ」とて。笛座の前へゆき。唐頭巾に法被を着るもあり。又は水衣の肩おろすのみにて物着なきもあり。此間に唐子二人一の松の邊に立ち居るを。シテ仕手柱先に出てゝ見て。「やあ如何にあれなるは唐土に留めたる二人の者か」と呼び掛け。二人「さん候童名そんしそいうなり」と答へ。シテ「是は夢かや夢ならば。」二人「處は箱崎。」

シテ「明けやせん」と。互に歡喜措くあたはず。「春霄一刻その價。千金も何ならず。子程の寶よもあらじ」の地になりて。シテは扇を上げてこちへ來れと舞臺を後に指し。シテは大小前に。唐子二人は舞臺に入り脇正面の方に居ならぶ。かくて「もろこしは心なき。夷の國と聞きつるに。かほどの孝子ありけるよと。日本人も隨意せり。狩とや箱崎の。神も納受し給ふか」と。正面の方にシテ合掌して。本謝の心をあらはす。

ワキ歸國をゆるす

狂言そんし、に向ひ。「日本一の追手がおりて候。急ぎ御舟に召され候へ」といひ。そんし又その由をシテにいふと。シテはワキに向ひ。「追手がおりて候程に。船に乘れと申し候。御暇申し候べし」といへば。ワキは目出度うやがて御歸國候へ」といひシテ立つと。日本子も「あら悲しや我等をもつれて御出て候へ」といひながら立つ。

日本子もゆかんといふ

「げに〳〵出船の習とてはたと忘れてあるぞ此方へ來り候へ」と。仕手柱の方へ行かんとし。子方も少し出づるを。ワキは「暫く」と呼び留め。「祖慶官人の事は力なき事。此をさなき者共は。此所にて生れ相續の者にて候程に。何くまでも某召し使はうずるにてあるぞ。こなたへ來り候へ」といふ。日本子二人同音にて。「あら情なの御事や。大和撫子の花だにも。同じ種とて唐土の。唐紅に咲くものを。薄くも濃くも花は花。なさけなくこそ候へとよ」と歌ひながらワキに向ひて泣く。

ワキ日本子にはいるさずといふ

「時刻うつりて叶ふまじ。急ぎ御舟に召されよと」と。唐子うたひながら立てば。「呼ぶ子もあれば」と其方むき。「引きとむる」と日本子むき。「中にとゞまる」「父ひとり」と正面直し。「たづきも知らず泣きゐたり。身もがな二つ箱崎の。うらめしの心づくしや」と。扇捨てゝ膝つき安座。兩手にてしをる。情切にしてあはれ深し。

唐子乘船を促す　日本子引きとゞむ

「たとへば親の子を思ふ事。人倫に限らず。燒野のきゞす夜の鶴。

うつばりの燕も。皆子故こそ物おもへ」と。面伏せて途方にくれたる心あり。「いはんや我等さなきだに。明日をも知らぬ老の身の。子故に消えん命は。なに中々に惜しからじと」と又面伏せて考へしが。心定めて面上げ。「今は思へばとにかくに。」「舟にも乗るまじ」と唐子を見。「とまるまじと」と日本子を見。「殿に上りて十念し。既にうき身を投げんとす」と。立ちて岩の上にあがる心にて少し出て。合掌してつか〳〵と正面先へゆかんとするを。唐子は右に日本子は左の袖に取りつきて「之をいかにと悲しめば」と四人とも泣く。シテは左右を見て。「さすが心も弱々と」と跡に下り安座して両手にて泣く。

ジテ入水せんとす

ワキ藩國なゆるす

四人の子は手をはなして皆地謠の前に並び下に居る。

ワキ「よく〳〵物を案ずるに。物のあはれを知らざるは。只木石に異ならず。殊更出船の障りなれば。早々暇とらするぞ。とく〳〵踏國を急ぐべし」といはれて。シテワキに向ひ。「除りの事の不思議さに。更に誠と思はれず」ワキ「こはそも何の疑ぞや。當社八幡も御知見あれ。偽更にあるべからず。とく〳〵舟に乗り給へ」と聞きて。「これは誠か」と膝立て直し。「有難の御事や。誠に諸天納受して。此子を我等に。與へ給ふか有難や」と合掌す。此謠の間に狂言舟を脇正面に出だし。帆柱を立て帆を上ぐる用意して置く。

舟揖斎に出づ

「かくて除りの嬉しさに。時刻を移さず。暇申して唐人は」と。ワキに暇乞する心にて面伏せ。「船に取り乗りおしいだす」と立ちてくつろぎ。唐團扇持ちて舟に乗り。「折から波の皷の。舞臺につれて面白や」と。太皷打出しありて樂となる。四人の子もシテのくつろぐ間に舟に乗りて下に居たり。

樂

樂は舞臺一面にて舞ふべきものを狹き船中にてする事なれば。舞ひにくかるべきを。さながら軍艦のデッキてゝも舞ふやうに大きく見するがシテの腕力なるべし。されど邯鄲の樂とは心持おのづから異

なるべき事。既に第二卷の七十八頁にいへりき。此樂は又盤渉にする事もあり。

「陸には舞臺に乘じつゝ。名殘おしてる海づら遠く。なりゆくまゝに」と。雲の扇して正面を遠く打ち見やり。「招くも追風」とワキ招扇する。シテもワキに向ひ見て。「舟には舞の。袖の羽風も追手とやならん」と。左の袖あしらひ見て右に小さく廻りかけ。「帆を引きつれて舟子ども」と抱扇して帆柱を見上ぐると。狂言帆を引きあぐる。それよりかざして廻り。「よろこび勇みて」とイウケンして。「もろこしさしてぞ急ぎける」と舟の中にて留むるもあり。又舟より出て足詰めて留むるもあり。

紅葉狩

作物　山

前ジテ　美女　近江女　葛　葛帶　唐織若流し（緋大口に靈折の事もあり）

ツレ女三人又五人　女面　唐織若流し　侍女

狂言　供女　びなん葛　箔

ワキ　平維茂　梨子打烏帽子　白鉢卷　厚板　大口　長絹　腰帶　小サ刀　扇　弓矢持つ　背に矢一つさす後はモギドウ

ワキツレ四五人　從者

能のたかり　三の卷

素袍上下右の肩ぬき竹杖持つ一人は太刀持つ

アヒ　神の使

末社頭巾　上り髭　髮斗目　水衣　狂言袴　脚半

居　太刀持つ

後ジテ　鬼女

シカミ又は般若　赤頭　箔　緋大口　腰帶　打杖

平維茂戸隱山に狩せしに。折しも紅葉の頃とてやんごと上臈どもの幕打ち廻して酒宴半なる躰なりしかば。避けて外の山路にかゝらんとせしを。袖引き留められ酒いたくめぐりて酔ひ伏したり。其間に美女と見えしは鬼女となりて維茂にかゝらんとするを。八幡の冥助にて遂に悉く退治する事を作れり。太鼓あり。

作物出づ

囃子方座に着くと一畳臺の上に山の作物大小前に出づ　山には引廻しを掛け。上には紅葉の作枝あまたさしたり。

シテツレ次第にて出づ

次第にてシテ出て。女ヅレ三人もしくは五人つゞき出で。舞臺に立ち並び向き合ひて。「時雨を急ぐ紅葉狩。〳〵。深き山路を尋ねん」と歌ふ。打ちつれて紅葉狩に出でんとする心なり。此いづる時狂言の女も從ひ來り狂言柱の下に座つき居る。

シテ正面むきて。「是は此あたりに住む女にて候。」又一同に。「げにやながらへて浮世に住むとも今は早。誰白雲の八重葎。茂れる宿のさびしきに。人こそ見えね秋の來て。庭の白菊うつろふ色も。浮身のたぐひとあはれなり。」シテ正面に向き。「あまりさびしき夕まぐれ。時雨るゝ空をながめつゝ。四方の梢もなつかしさに。」一同々々音にて「伴なひ出づる道の邊の。草葉の色も日に添ひて」と下歌あり。それより上歌になりて。「下紅葉。夜の間の露や染めつらん。〳〵。朝の原は昨日より。色深き紅を。分けゆく方の山ふかみ。げにや谷川に。

シテツレ着座す

風の掛けたるしがらみは。流れもあへぬもみぢ葉を。渡らば錦中絶えんと。まづ木のもとに立ちよりて」と。シテ以下やがて脇座より地謠の前に順々にゆき。「四方の梢をながめて。暫く休み給へや」と。歌ひながら下に居る。狂言の女も同じく其下にゆき座す。紅葉の木陰に座をしめたる心なり。

ワキ出づ

此處に狂言女立ちて。「さても〳〵色うつくしき紅葉かな。皆々此所へ御出でなされ。幕打ち廻し屏風を立て。酒宴を始められ候へやー」といひ。又もとの座にかへる。

一聲にてワキ出て。ワキツレ四五人從ひ來る。ワキは弓矢を手挾みツレは竹杖を持ちセコとなる。維茂將軍戸隱山に狩に出でたる躰なり。橋掛に立ち並び。「おもしろや頃は長月廿日あまり。四方の梢も色〳〵に。錦を色どる夕しぐれ。ぬれてや鹿の獨なく。聲をしるべの狩場の末。げに面白きけしきかな」と。幕の方を見て秋のけしきに

ワキ一に出づ

ながめ入りたる心を見せ。「明けぬとて。野邊なり山に入る鹿の。あと吹きおくる風の音に。駒の足並いさむなり」と。鹿の音を聞きて勇み立つ文句おもしろく。「大丈夫が。やたけ心の梓弓〳〵。入る野の薄露分けて」と。やう〳〵山路に入る心にて舞臺の方をながめ。「ゆくへも遠き山かげの。しがきの道のさかしきに。落ちくる鹿の聲すなり。風のゆくへも心せよ。〳〵」と。シテの居る方を見つけたる心にて。謠切るゝと「如何に誰かある」と呼ぶ。太刀持ちたるツレ「御前に候」とすわる。ワキ「あの山陰に當つて人影の見え候は。如何なる者ぞ名を尋ねて來り候へ。」太刀持「畏つて候」といひて舞臺に向ひ。「いかに此内へ案内申し候」といへば。狂言立ちて「案内とは誰にておじやらします」と問ふ。太刀持「是に御座候御方の名を何と申し候ぞ。」狂言「まづそなたなるは何と申す御方にて候ぞ。」太刀持「これは餘五の將軍平の維茂御狩のため出でられて候。」狂言「これもち

アヒ行きて上臈の名を問ふ

にてもあれもちにても有らば有れ。こなたなるは只さる御方とばかり御申しやれや」というて引つ込む。

太刀持かへりて。「名を尋ねて候へば。やごとなき上臈の。幕打ち廻し屏風を立て。酒宴なかばと見えて候程に。懇に尋ねて候へば。名をば申さず。唯さる御方とばかり申し候」と告ぐ。ワキ「あら不思議や。此あたりにて左様の人は思ひもよらず候。よし誰にてもあれ上臈の。道のほとりの紅葉狩。殊更酒宴の半ならば。かたゝ乗打かなふまじと」と。道を替へて他の嶮しき方に避けんとする心を示し。「馬よりおりて沓をぬぎ」と弓を杖に二足上げ引きて馬よりおるゝ仕方をなし。「道を隔てゝ山陰の。岩の崖路を過ぎ給ふ。心づかひぞたぐひなき。〈〉」と。舞臺の真ン中にゆき立ち居る。ワキツレは皆切戸より楽屋に入る。

ワキ避けんとす

シテは「げにや數ならぬ身程の山の奥に來て。人は知らじと打ち解けて。獨ながむるもみぢ葉の。色見えけるが如何にせん」と戀の心をほのめかしいひ。ワキは「我は誰とも白真弓。唯やごとなき御事に。恐れて忍ぶばかりなり」と。唯敬禮のために道をかへたるをいひ。シテは「忍ぶもぢずり誰ぞとも。知らせ給はぬ道の邊の。たよりに立ちより給へかし」と宴席に連ならん事をすゝめ。ワキは「思ひよらずの御事や。何しに我をば留め給ふべきと。さらぬやうにて過ぎゆけば」と。留められゝ覺えなきにより猶はづさんとし。シテは「あらなさけなの御事や。一村雨の雨やどり」と立ち。ワキ「一樹のかげに。」シテ「立ちよりて。」地「一河のながれを汲む酒を。いかでか見すて給ふべきと」とワキの方に出て。「耻かしながらも。袂にすがりとゞむれば」と。少し面伏せて耻かしき心を見せ。ワキの左の袖に手をかけ引きとゞむる形をなし。「さすが岩木にあらざれば。心よわくも立ちかへる」と。シテ跡へ下る。ワキはシテの顔を見て

ワキを引きとゞむ